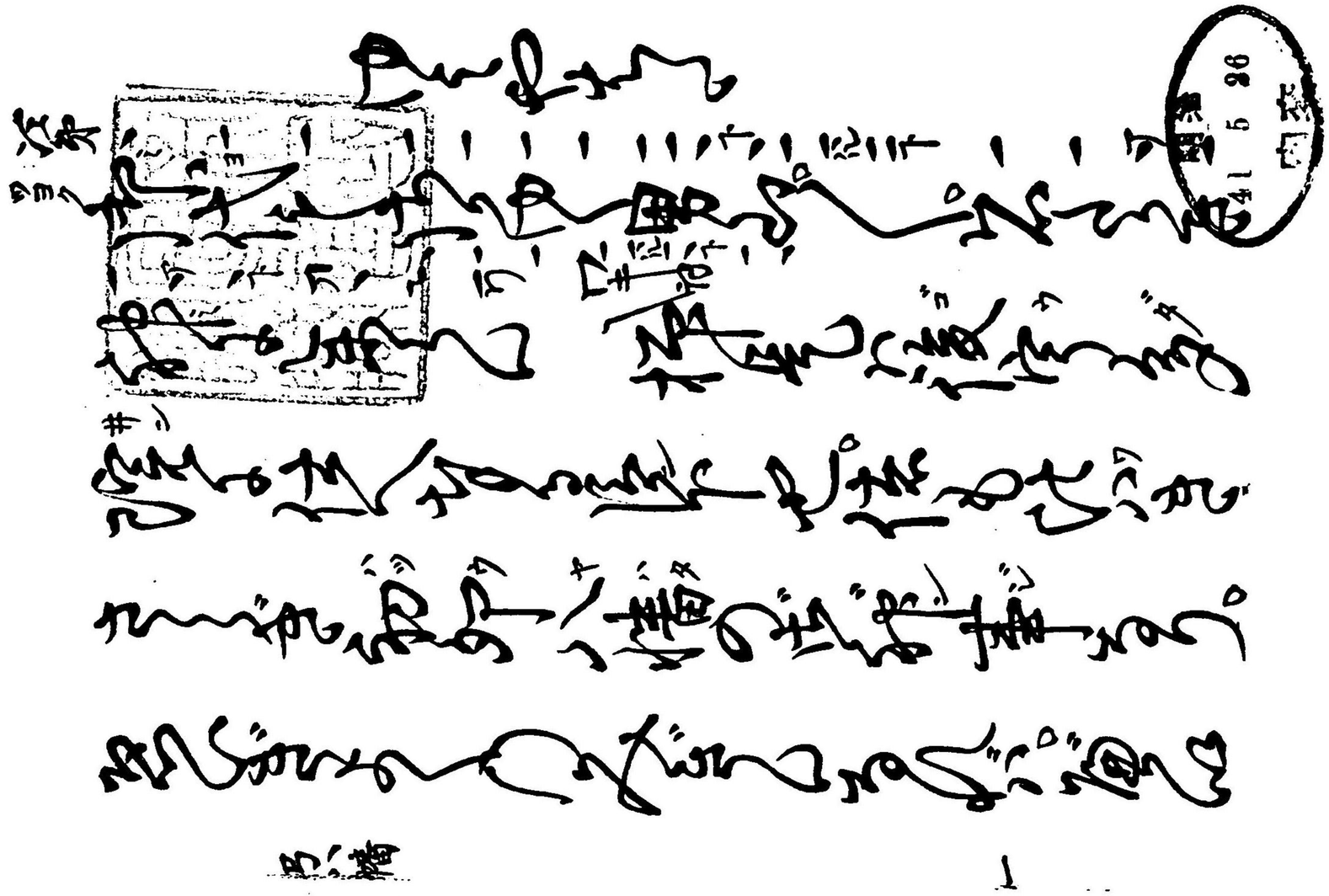


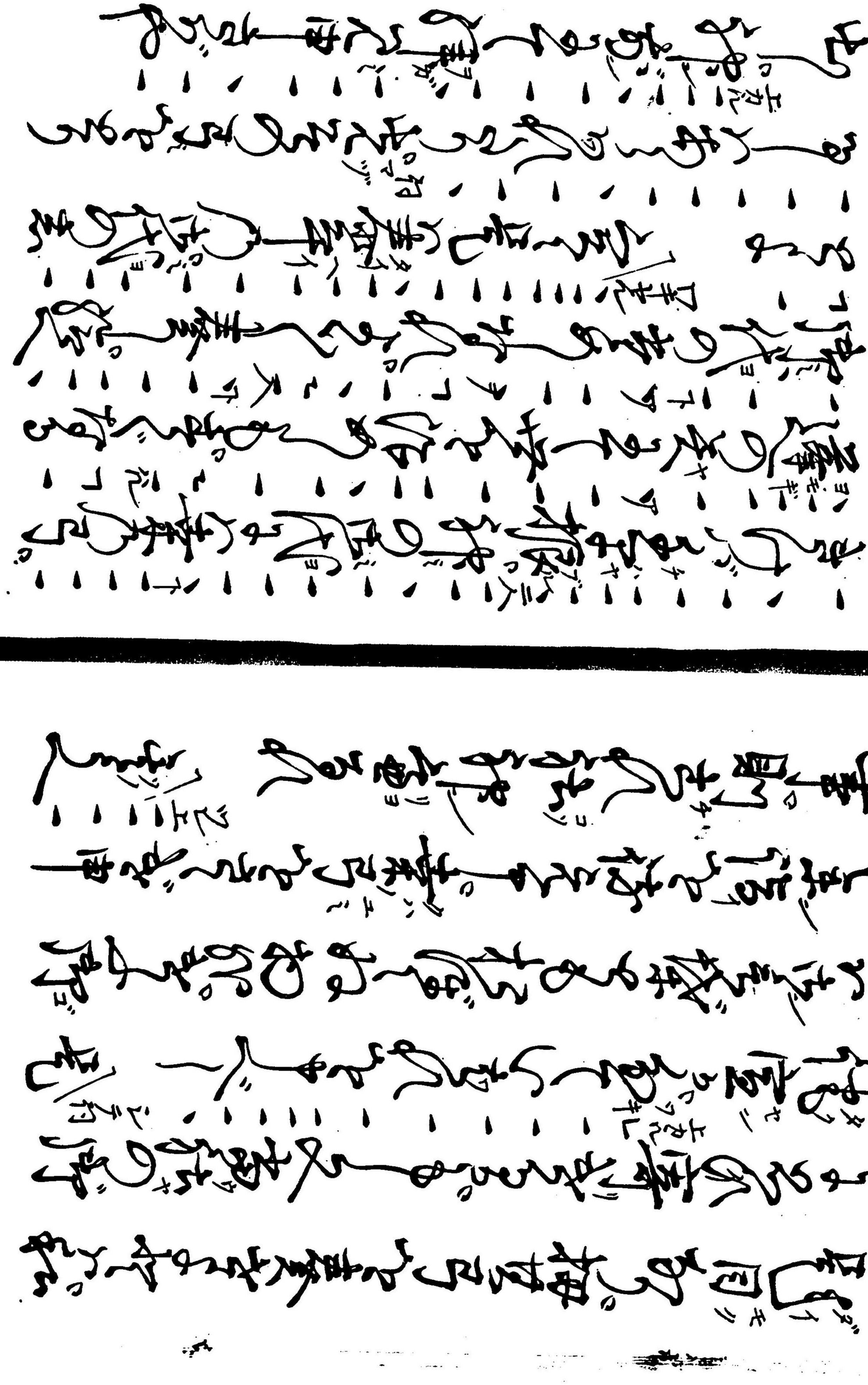
ぎれし春信仕事もの宣旨と夢。
[illegible]
海波静なる時なれや。
鳴の雲も消なんとて。宮九重に近き
ぐ。ゆきの旅もゆるなれ。
日影も南なる八幡山春なりぬ
心静なる神垣を申さぬぎるまでく
神垣の日もきさぎのちと
てやや長閑き春のまき花うれ
花の都に宮なれや。雲も花さまり。
凡もなり
君が代八重なるやちよ

よはぎまで成ぬ。ぱっぱとなりて昔
の物。咲。樹の姿色も常盤にて盛み。
ぞりけるものどもなりて。君安産をよ
民あつく国の宰ざしも行ぎき。
中すりも君と寄りの神ぶるよりわ
て拝れもまの光の日影ろの

時代の風と君の道をぐ
よ出ぬ。ぱっぱ松立き。
枝も深きる樹の影ぱ雲ぬ
時代を久うる光ぱのうち男み

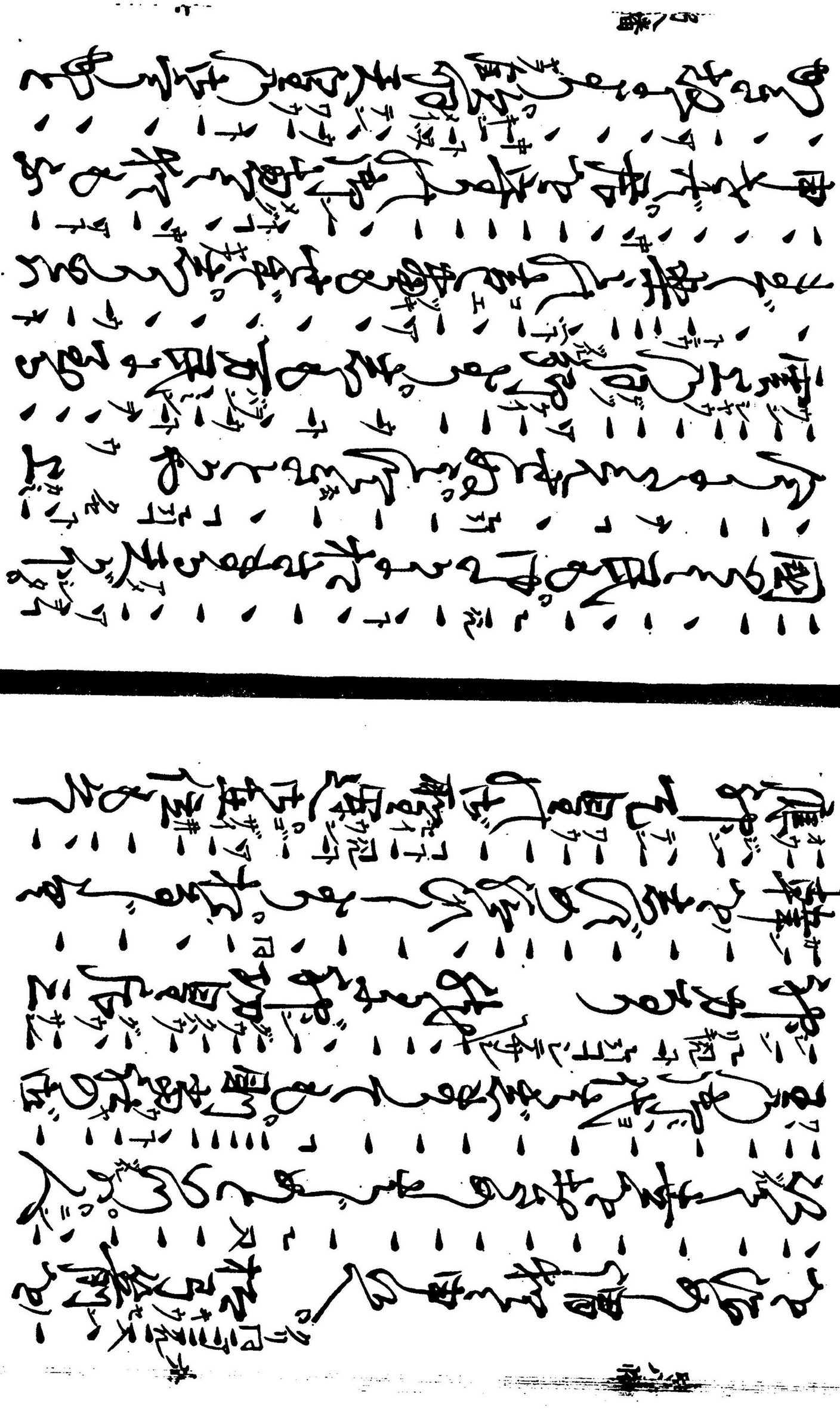
こゝにてあやまちをしたる。彼は
藏とゝのゝなる。彼は面ゆゑにて
ぬなり〳〵
そもゝ面白ばば彼
事にて。糸信の人ぐ相はき中よ。
見なる箱錦の袋よ入をもちる人
ゆとこたりぐそも行家より手信

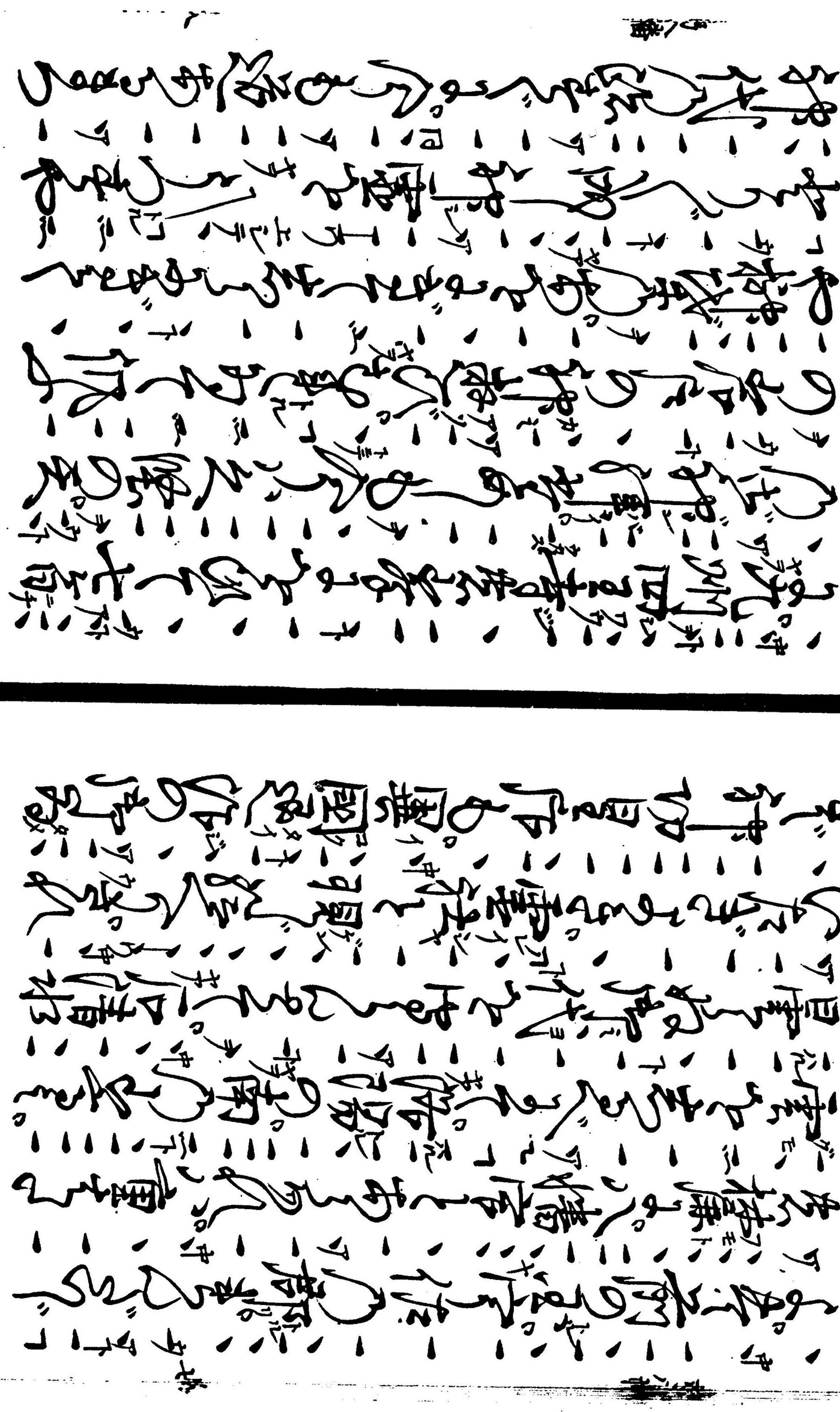
人ぐ見い面白ゆと計ら人〳〵を
使へ申し居安全と祈申ものも
又見よ持るい素代号あり。其及
びあきれぐいまず養申ぐ申ぐ
今ぐ手信を待えゆ。居人指ぐこの
まゝ有難〳〵出そめぐこと

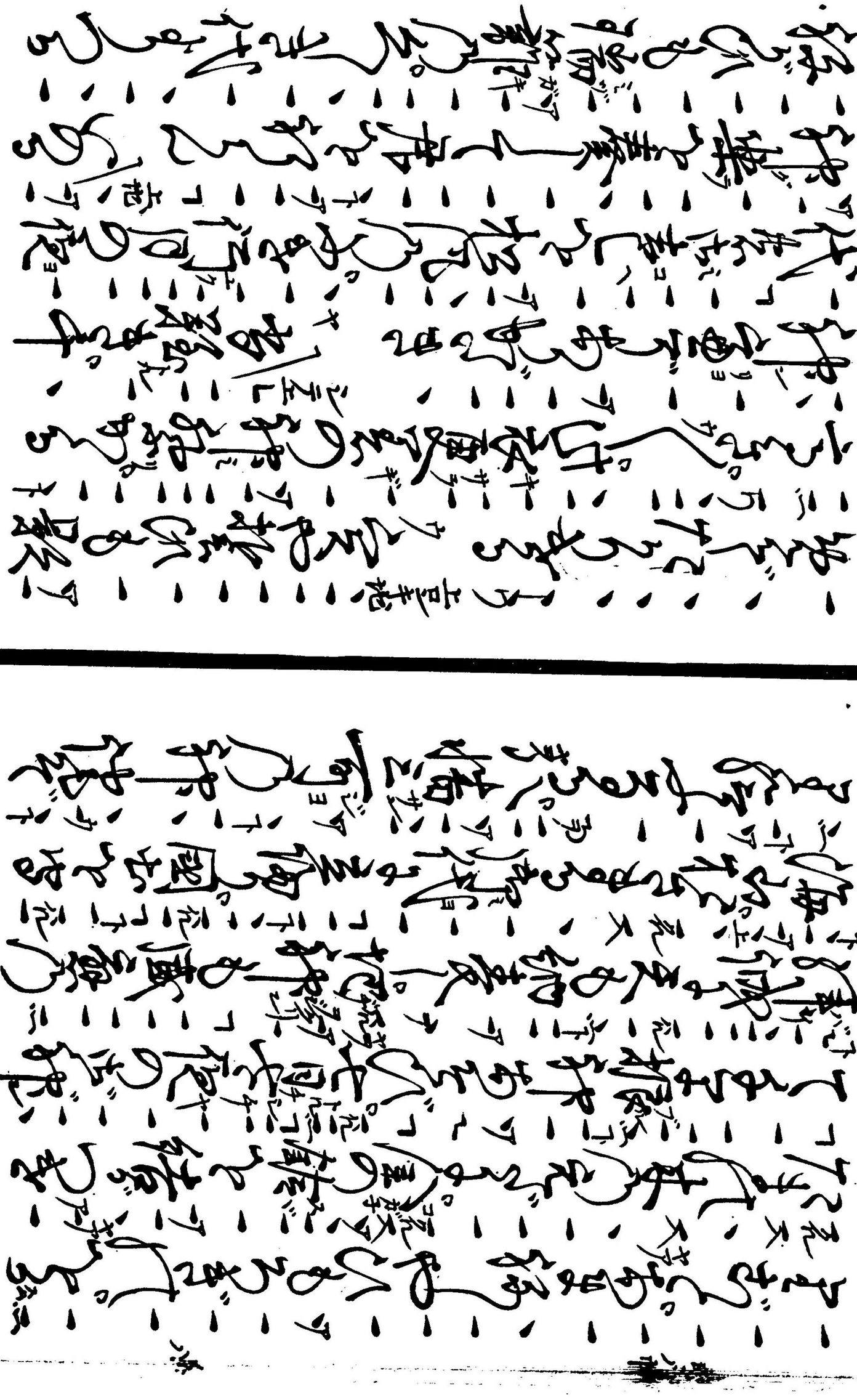


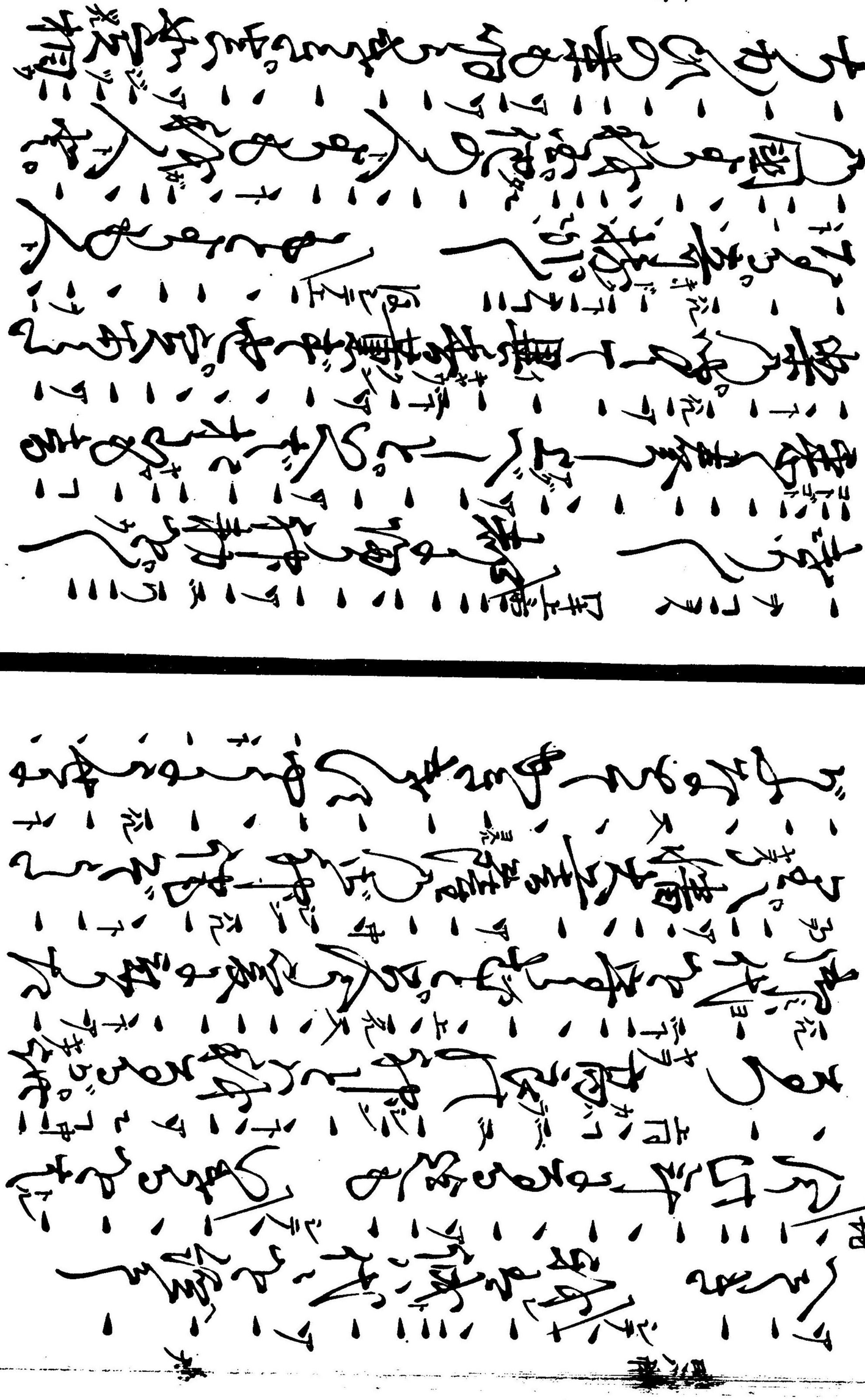
シテイカ
やうすを高らかに行ひ出て有る
ツレ上
べきぞ　さ
モロコシ　シウ　ヨ
唐土の代とぞ
シテイカ
國の主の
キウセン
弓箭をつゝ干戈
カンクハ
タメシ
ためし例をもつて
ツレ上
弓を儀よられ
シテイカ　ツレ上
劔を指す作もる
ギ　ツレ上
泰平世の
ヨウ　シウ　ヨ
なれば周の代も
ホウ　チウ　ヨ
中納言

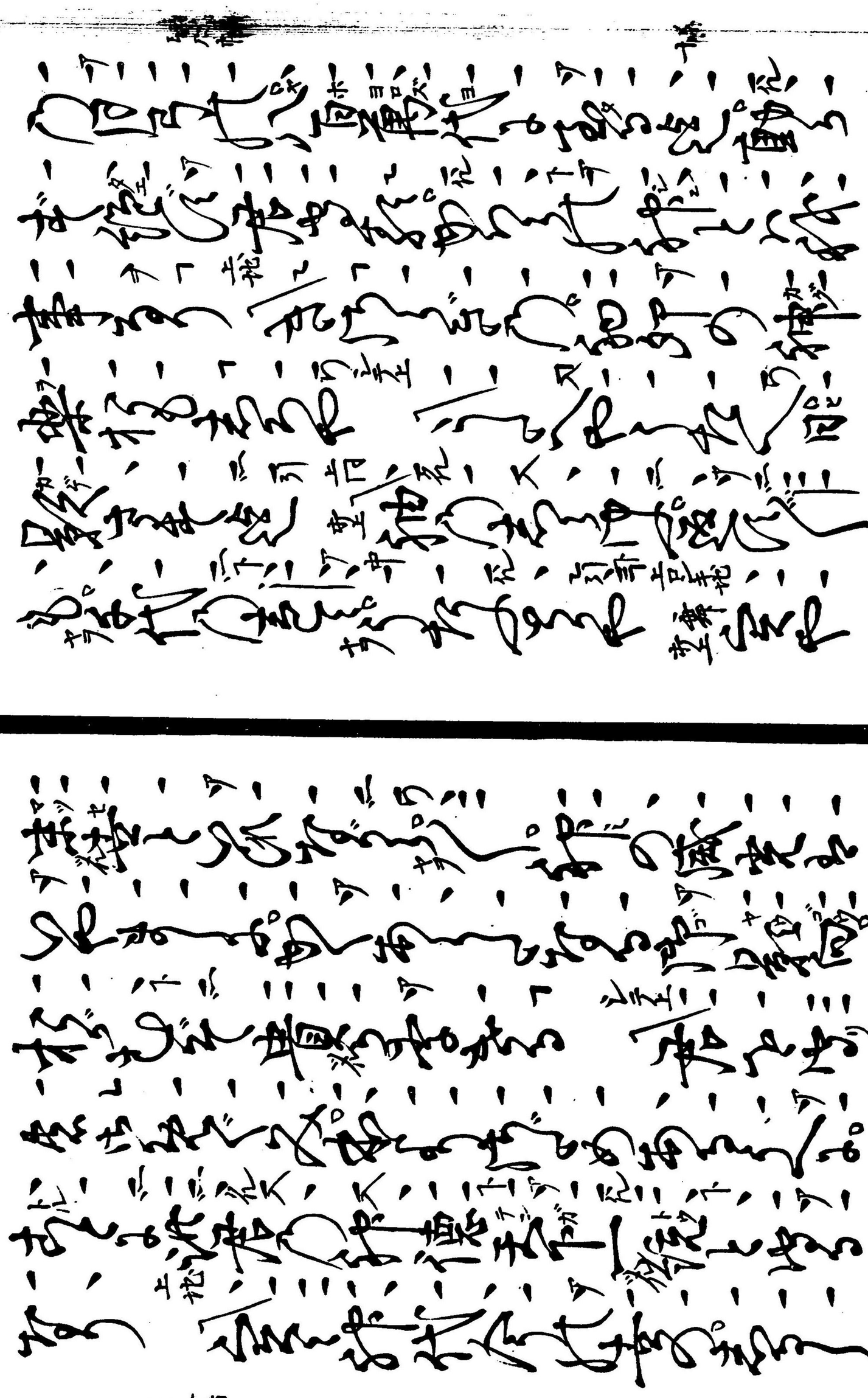
ツウ
大内
ツウ
技業はなをひきゞ
ヨモギ
蓬の
ウ
やうもかぐ
ウ
ちりの海も
ウ
こゝにゝゝ
ヤウ
君の
ヤウモク
びゝまゝ
ゴ
御神
ワキカ
ものまる

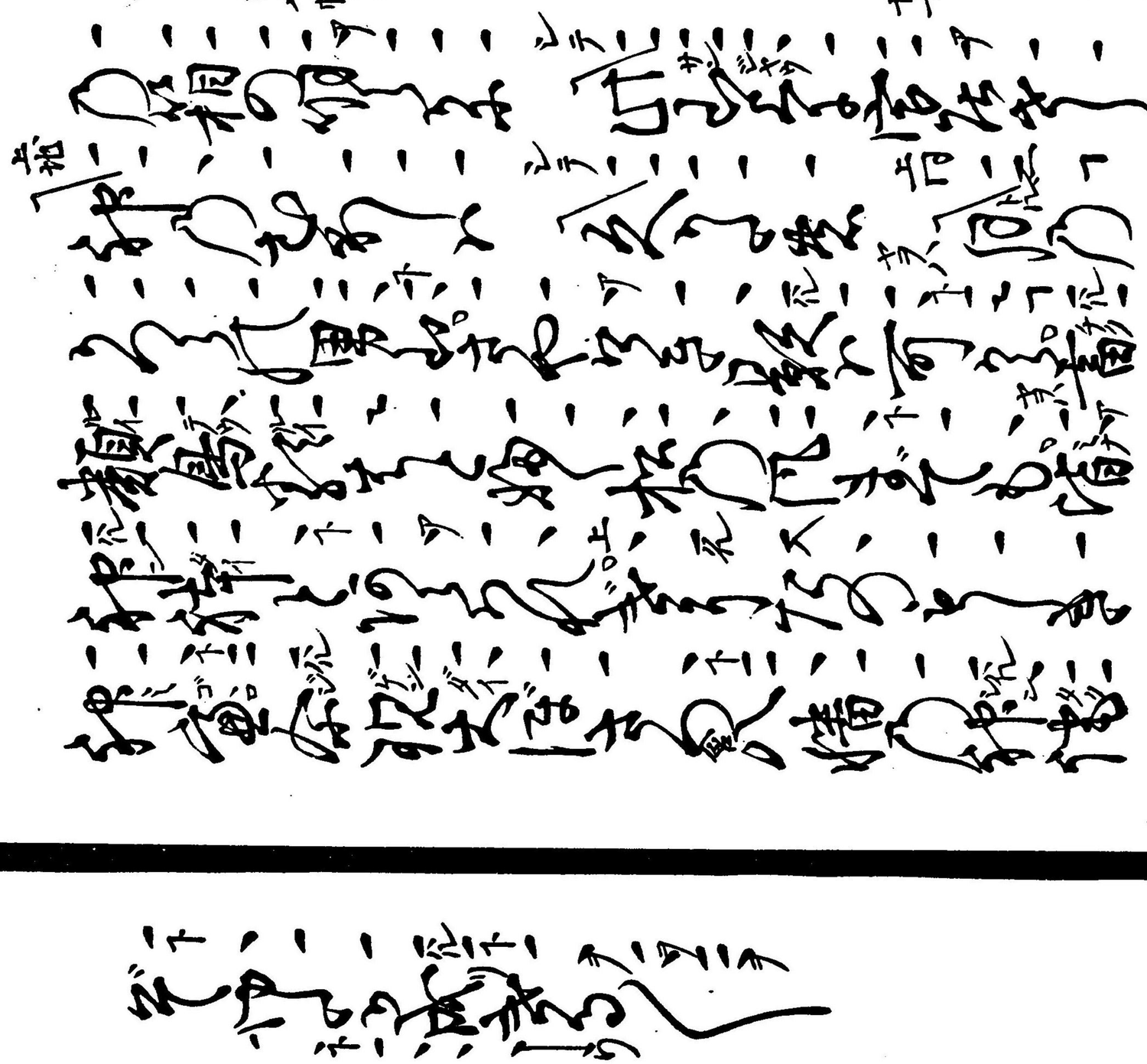












鉢木

佐野ノ太郎左衛門尉ヨリ行ヒ遣ハされ候ヒ者ニ対シ申シ候ヒ趣

行倒れ者ニ対シ申シ候ヒ者ニ対シ申シ候ヒ趣

もうしつたへ候ヒ者ニ対シ申シ候ヒ者ニ対シ申シ候ヒ趣

是ハ一夜ノ宿ヲ可求

佐野ノ門ヲ過ぎ候ヒ。我世狂ハ信法國

ヲ思ひ入れ。ほうしよ雪ヲ胸ニ狂ヒ。

世ノ世ノ鎌倉ヨリ。上ヨリ下ヲ俗

行よ出でやとろ信濃なる。
清河の嶽よ立煙。遠近の
独さも。松やの所のまつる
分よなきものの里へぞ世を
離れ坂さ。衣ばらまぶ門を
ぶたいぶ伊ぶぞよや。佐野の

二十一、二、元、八十三三十 伊

ろろふ。ろまきろ、ろうく 泉の狩よ。
上野ぶ佐野の渡りよ。長俗
山やと雪の物うろ。ろ可可
宿とやらぶやとろ。いろ浅尾の四
へ楽四国ん 俗みろ海ぶぞ
毛俗行者ろ。一夜の宿と清

如此人（ヲヒト）は寺（テラ）まうでの道（ミチ）にて
宿（ヤド）まうし給（タマ）へ。
ど
さぶ（ワキ）
さぶ侍（ツレ）は長（ナガ）き侍（ツレ）
さぶるまく
みまくわらひ（ツト）の面（モ）へ出（イデ）ぬ。此由（シテイウ）を
やさぬ（ヤ）とも
あらん（アラ）

雪ぶいふ寺（テラ）まうの人（ト）の面（モ）作
らんぞれ雪（ユキ）も鵜（ガ）毛（モウ）ぬ似（ニ）て乗（トン）で
叡山（サンラン）へ鶴毛（カクシヤウ）とさて言（イヒ）て俳
個（クハイ）きらひ
て雪（ユキ）よ
とまて
俳個（ハイ）きべ
上カ（カミ）ッ（ツ）ヨ（ヨ）ク（ク）ニ（ニ）ハ（ハ）ク（ク）ヒ（ヒ）ニ（ニ）ハ（ハ）ク（ク）ヒ（ヒ）
狂（ク）も打（ウチ）て

抽せでき。細布（ホソヌノ）衣陸奥（ミチノクニ）の。きよの宮（アサカ）
ーーー

安き寺をたづねて泊まる。夜ふけぬれば、いやく見苦敷しるまゝ、一夜を止めくれとゝ。留まり給へ。我れ不出家の僧、宿に思ひもよらぬ事なれども、十八町あなたの里、そこよりも紀州の境、義ぬ出家、一夜宿出家、法師、痛わしくはなはだしきまゝ、お断り申す。

なほ人と侍りてはわかつれ清まし、
いと、、、

わきへ行る雪を行方(ユキガタ)と出(ウセ)し
一可(ヒトトヨロ)よきぎそして猶なる雪を打(ナ)
きしめく雪は氣(ケシキ)上カル久(ツヨク)一、
心よ似るぞ中(トニ)一一て元(ハ)ト一一、
一ウ千、、(ネ)駒ゆめ猶打松
ふうぎもなす作野の海(ウミ)に雪の多(ユフ)
雪(グレ)が模よ待(ヤマト)ゆ大和路(ジ)や三輪(カムヨクト)

一一ヤ一一一一
ぐきもなる作野(イトノ)の海(ウミ)、(トノウ)一一
死(ヤマ)ヤ一ア一ヤ一一一元
きみ路の作(ツクリ)海(ウミ)に雪の雪(グレ)一一元
一ヲ一コト、ヤ一一一イヲ一一一ル
よれ作るまぎ海(ウミ)ぐんより(キ)て雪(グレ)ぎ
一一一ヲウ一一
一一一ヲウ一一
一一一ヲウ一一
ゆへど一(トヨ)夜まぎ海(ウミ)ゆ海(ウミ)へや(ウヤ)人(ヒト)雪(グレ)
一一ア一一ア一一
一一ア一一ア一一
も旅の宿(ウヤ)、作(カル)物(ソメ)なぐら作(ツクル)物(ケ)の
一一一一一一一一
一一一一一一一一
一一一一一一一一

二ツニテ元一イコイテヤトシ一ヰ一元イ一ヰ
降れる雨の末陰見ハ雪の
ニキ ツ 一 ヤ 上 ヘ 元 ニ ニ イ ヤ ニ ツ ニ ツ
降りてうきぶるまを拾ふ
ニ ニ 一 元 ニ ヤ ニ ツ ツ ニ
ぶり法ぶ中ぶ
ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ
いるる
ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ
お宿ハ中ていへども行みても
いへ
いへ
ぎるもの
ぶ
ぶ
折節見る雲の飯ける程よ
ツ アハ イヒ ケル ヤ

うぶぎいまるに拾られるへ ヤテ ちぶば
其雨ぶ降ぶ中ぶ お宿ぶ
ぶ ぶ ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ
ぶまぶ行ぶ
ぶ ぶ ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ
ぎるもの ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ
折節見る雲の
フシ アハ
飯の有ル
イヒ ル
ぶ ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ
ぶ ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ
ぶ ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ

みて給り侍へ　シテ　おもしろきう
ぎりと仕るこれでまゐらせられく
心得よう　シテ　趣で　詞業とヤスわい。
去へ　イニシ　ものよりの時　ウタ　ものよ　ヨミ　讀侍よ　シ　仕ツ
たらと　コツ　仕ってよ　ぶらい　詞業を
ぶって　ヒ　命　シンミヤウ　をぶぎ　ぶや　ヒ　盧　セイ　ぶぐん

ぶ　ユメ　ぶ　エイグハ　五十　ソノカン　年　ダン　其　郡の
ぶ　ヒ　花　ヒ　まく　ヒ　ぶ　ヒ　ぶ　ヒ　ぶ

扨部屋に松尺を置き、一一一

梅櫻松を倩みて。あれ屋をまもる
ものとて。某ぶ秘蔵(ヒソウ)をへだて来(コンヤ)
の杉をあつまる。是をぜるなたき
あてゆけるぶ。いやく(ワキ)
是に思ひもよらぬ事ぶ。
いかゞ能よるべぶも。月花(シゼン)又なくて去(ヨ)

よ出で給ふ時は慰(ナグサミ)まて同伴(レテ)
ものもよるべぶ。いやそれも
身は埋木(ウモレギ)。花咲(ハナサク)ぬ事あるべぶ。
今は身をあらぶ(ツレタル)ぶ
ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、
ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、
ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。

法の新と見るを
ゆきふりて
きえの新
身を
雪封じて
まづ先きぞ梅
べきやうもなく
梅の花
雪の梅

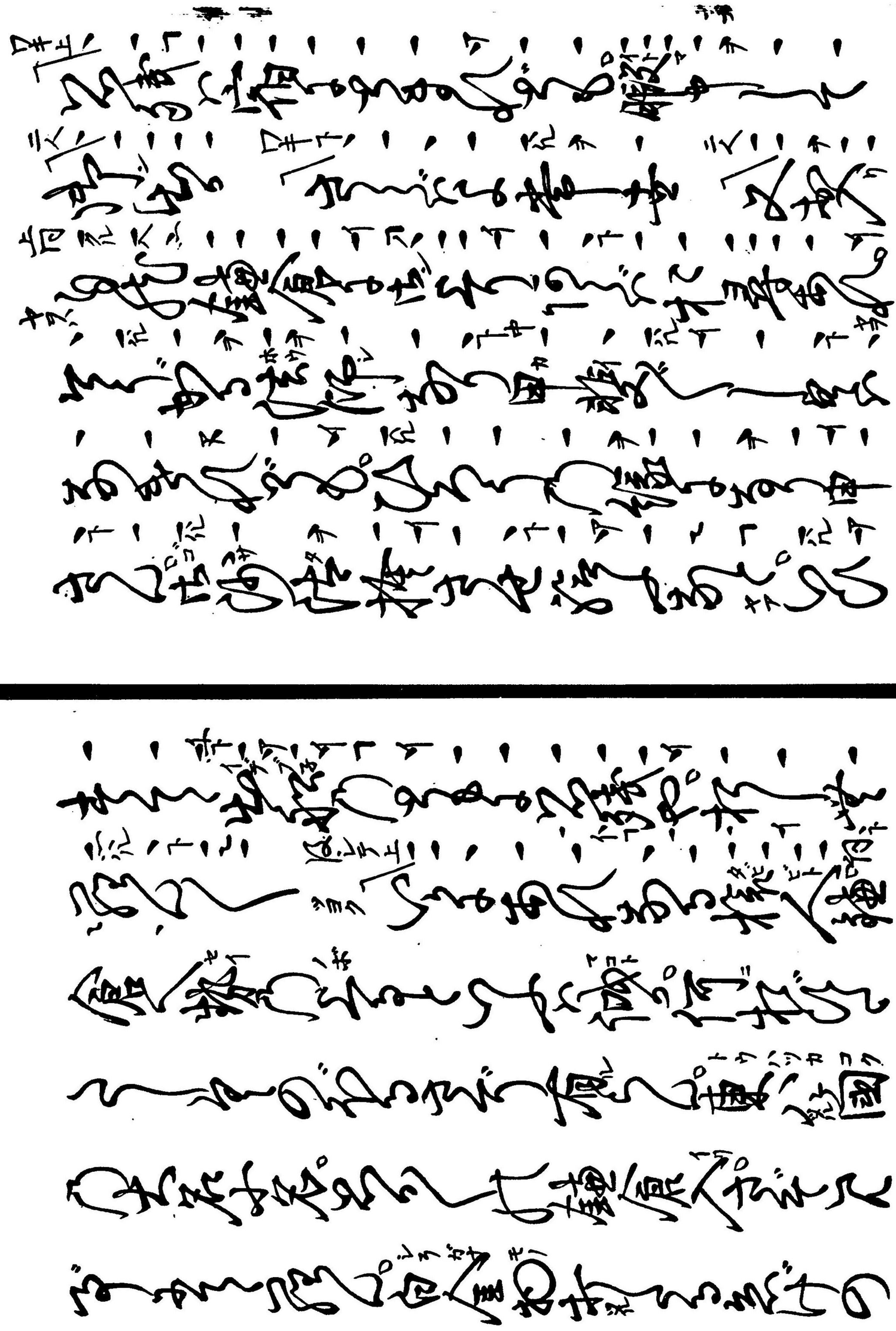
イキ、ヤ、ヤ、ヤ

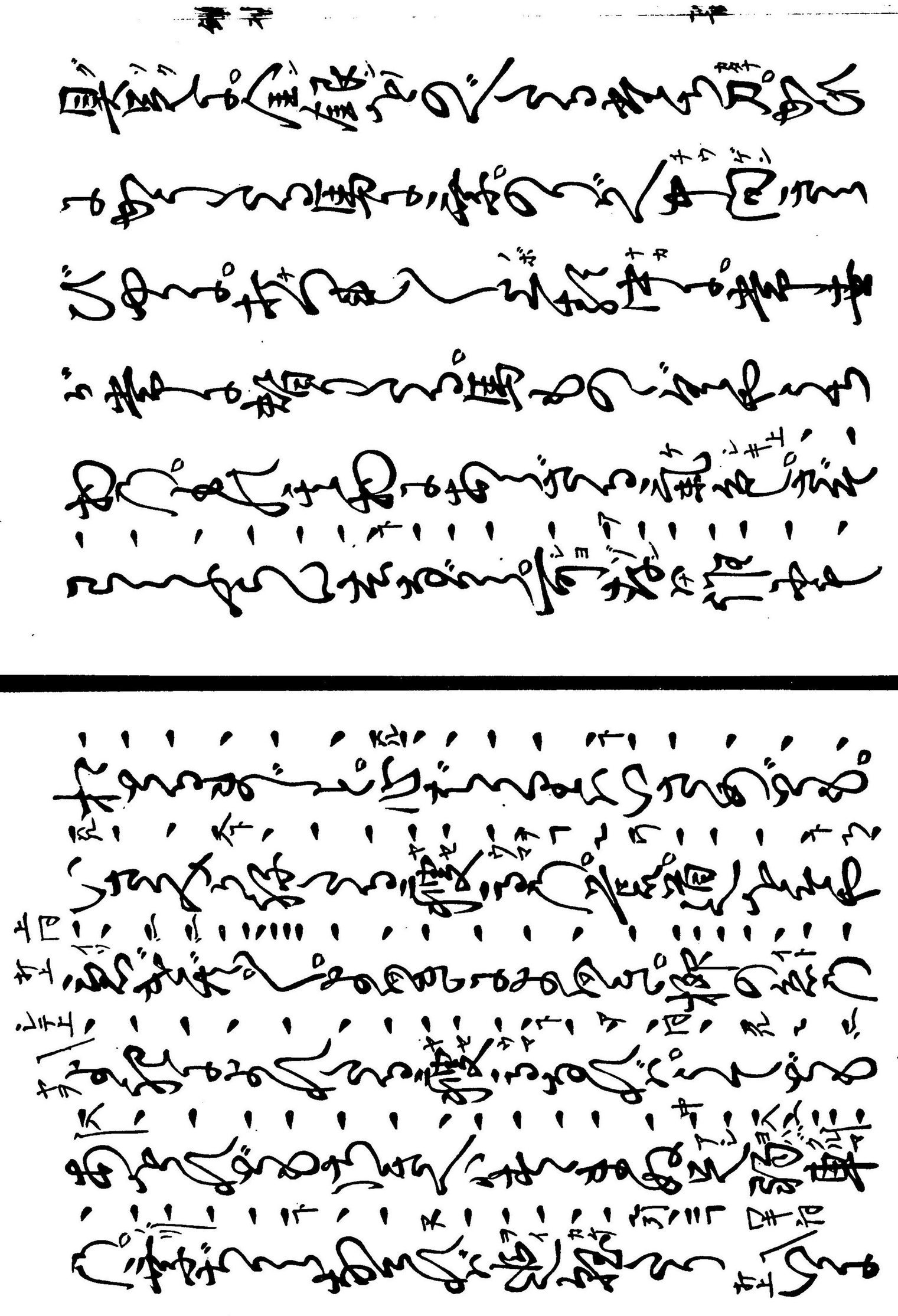
出よと神もいはるるあらて作
ワキ いはる中に。主人（アルジ）の古名字（ゴシヤウジ）をとゞ行くゝ
ぞ取（レテ）るゝ いや某は名字もな
き者まて
ワキ 行て作た作（タバビト）へとい
て。自然（シゼン）の時の為まくに。
行（ナニ）き来（クル）べき古名字（ゴシヤウジ）を取（リ）出ゞ
ワキ 扨（レテ）は行て見合べき。其（コツ）作
野原の東門の尉殿を壹ゞなれる果
ワキ みて
ワキ 行（ナニ）て和授（レテ）の数（サンゞ）
ワキ 狩（テイ）に成（リ）給（レ）てゝ
ワキ 其まゝ
て。一族（イチゾク）ども押領（オウリヨ）せられる和授の
ワキ 名をとり
ワキ なをされに行て

鍾倉ノ古ニテ作レタル甚ダ佳作
ナリ　運慶ノ作ル所ノ最明寺
殺生ノ修行ノ出ルニ及ビ加様ニ
ナリ　ナレバ　ノ　ノ　ノ　ノ　ノ　ノ　ノ
具足ノ頭長刀ノ太ク又ハ馬モ
ナリ　ナリ　ナリ　ナリ　ナリ　ナリ　ナリ
ナリ　ナリ　ナリ　ナリ　ナリ　ナリ　ナリ

ノ鍾倉ノ古ニ大ナル　ノ　ノ　ノ　ノ　ノ
ナリ　ナリ　ナリ　ナリ　ナリ　ナリ　ナリ

[illegible]
[illegible]
[illegible]





脇に有る中前は　脇に國の軍勢
だん〳〵寄て有る　つれ立て来る
来て　其後軍勢中へ入る
ちぐれ〳〵と見とがめられる長力
を持やせる馬を自分ひく〳〵る武
者一騎出べし　こなた方へ出れと
は

脇に居る中前は　脇に居より其後軍勢
の中へちぐれ〳〵る見とがめられ
る長力を持痩せる馬を自分ひ
く〳〵る武者出べし　忍で尋て御
前へ出れとの事　出て

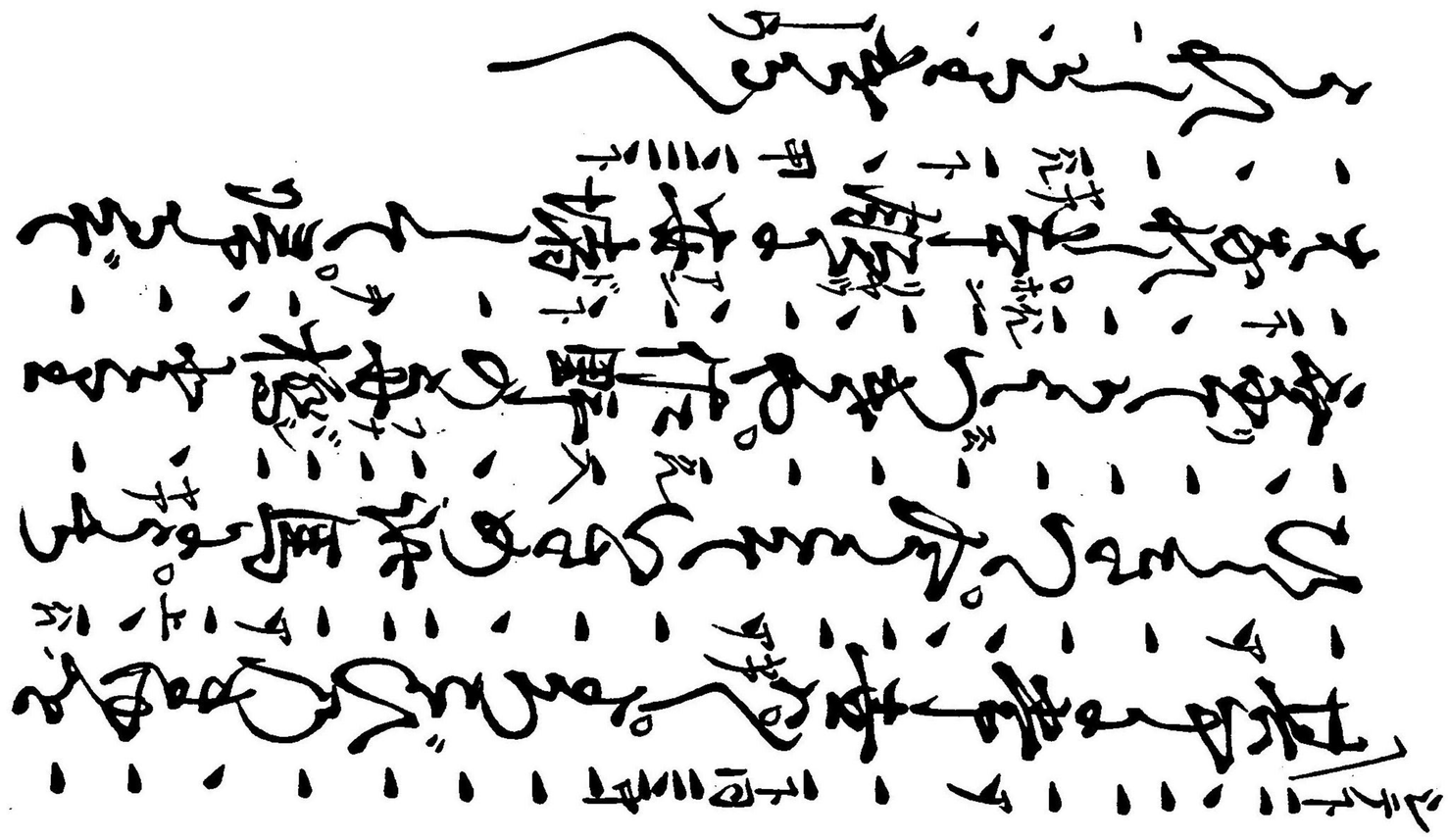
いろよ申し　仕（シテ）候（ソウ）ぞ
で御前へ参り候へ仕（シテ）て某（ボウ）
前（ゼン）へ参れとゞや　申（ソウ）の事　義（シテ）
見れば参らぬ者へ参ぐべきと
べー　いや（ソウ）〳〵其方共申さる
細々法軍勢の中ゆゝ見参

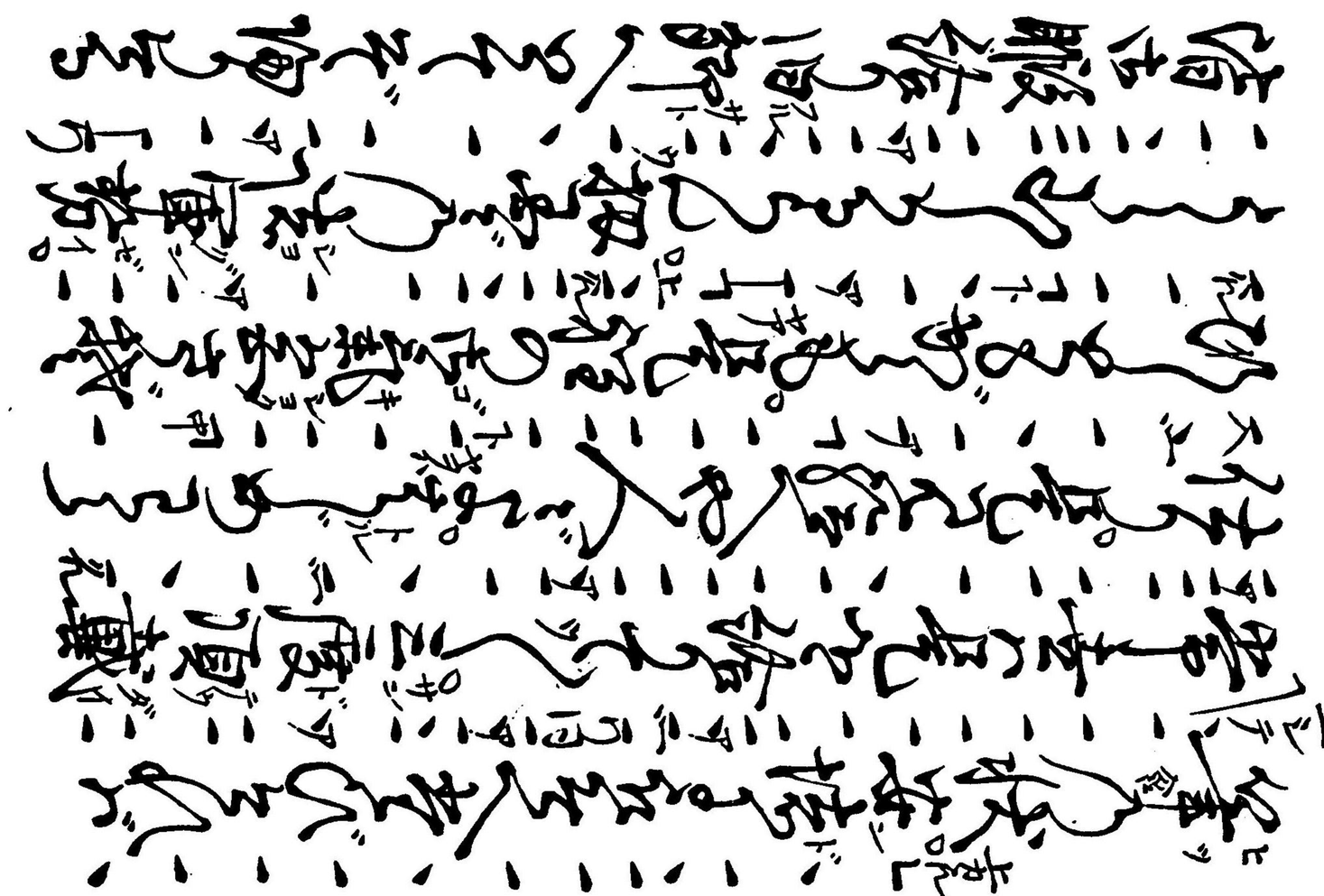
きゝ武者とつれ〳〵参れたる品申さ
仕ぐ申さぬ其方はどこぞ
武者もいらぬ程よ法師ゆゝ御
参れ　仕（シテ）と申さぬば法軍勢（ゼイ）の
中（ナカ）へいるも見（ミ）ぐ参（グル）敷（シキ）武者と参れと
ぐや　申（ソウ）　扱（シテ）は某ぐるま

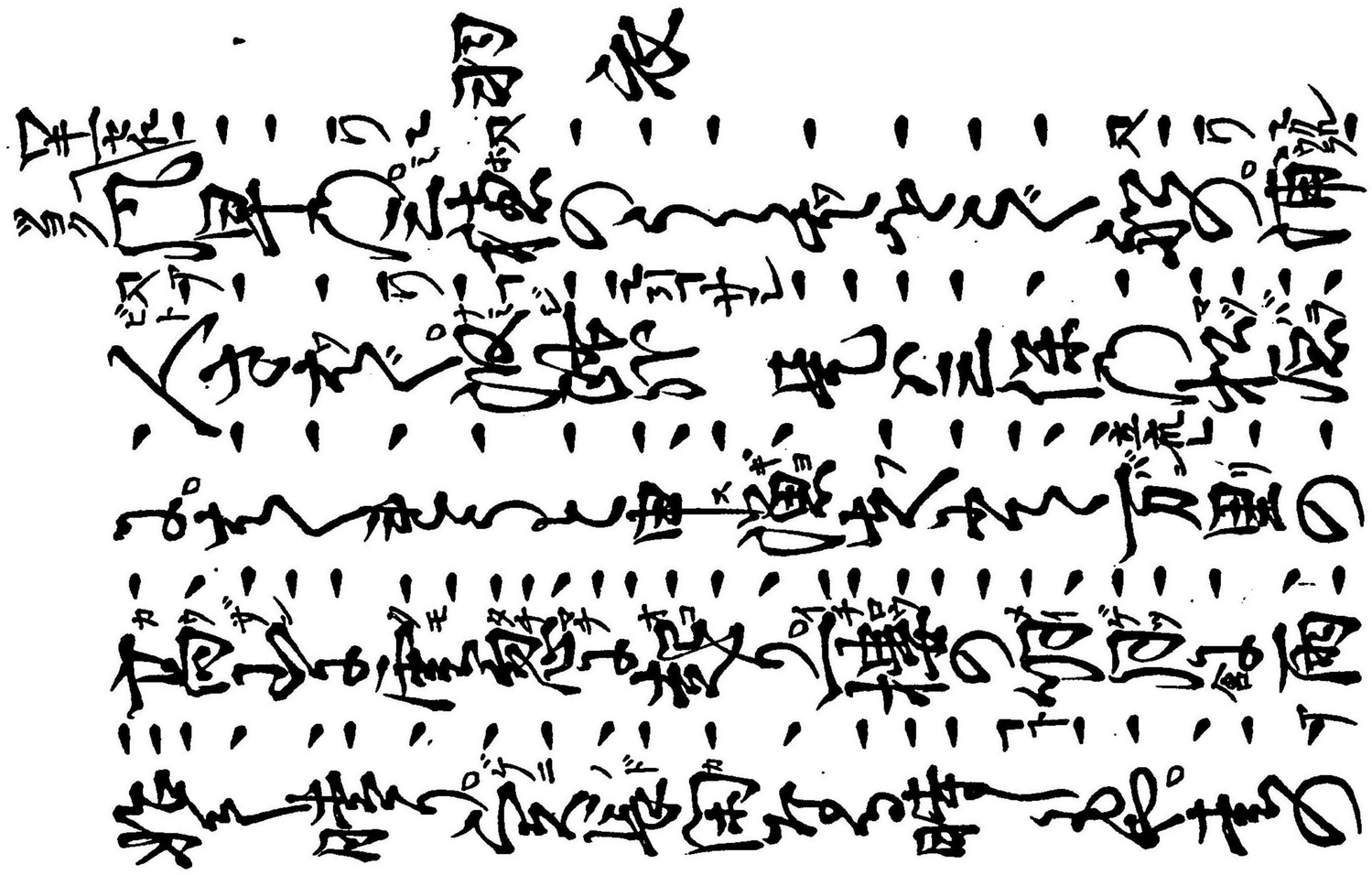
てべ〜ぶ茂きもと生ひ出へ枯れ
シテ
ぬ〜見も心なきもの。某ら敵人傑報
テキジンレム ホン
人と申上御前ゴゼンなる出されるべを
ニン
きねらまんるめなるよ〜それも
上カル
ちゃ〜あ〜ぶ〜ぢ〜出前ゴゼンまるんと。
ヲ
お康ユカさ〜て〜て〜ぶ〜今度ヨンドの早

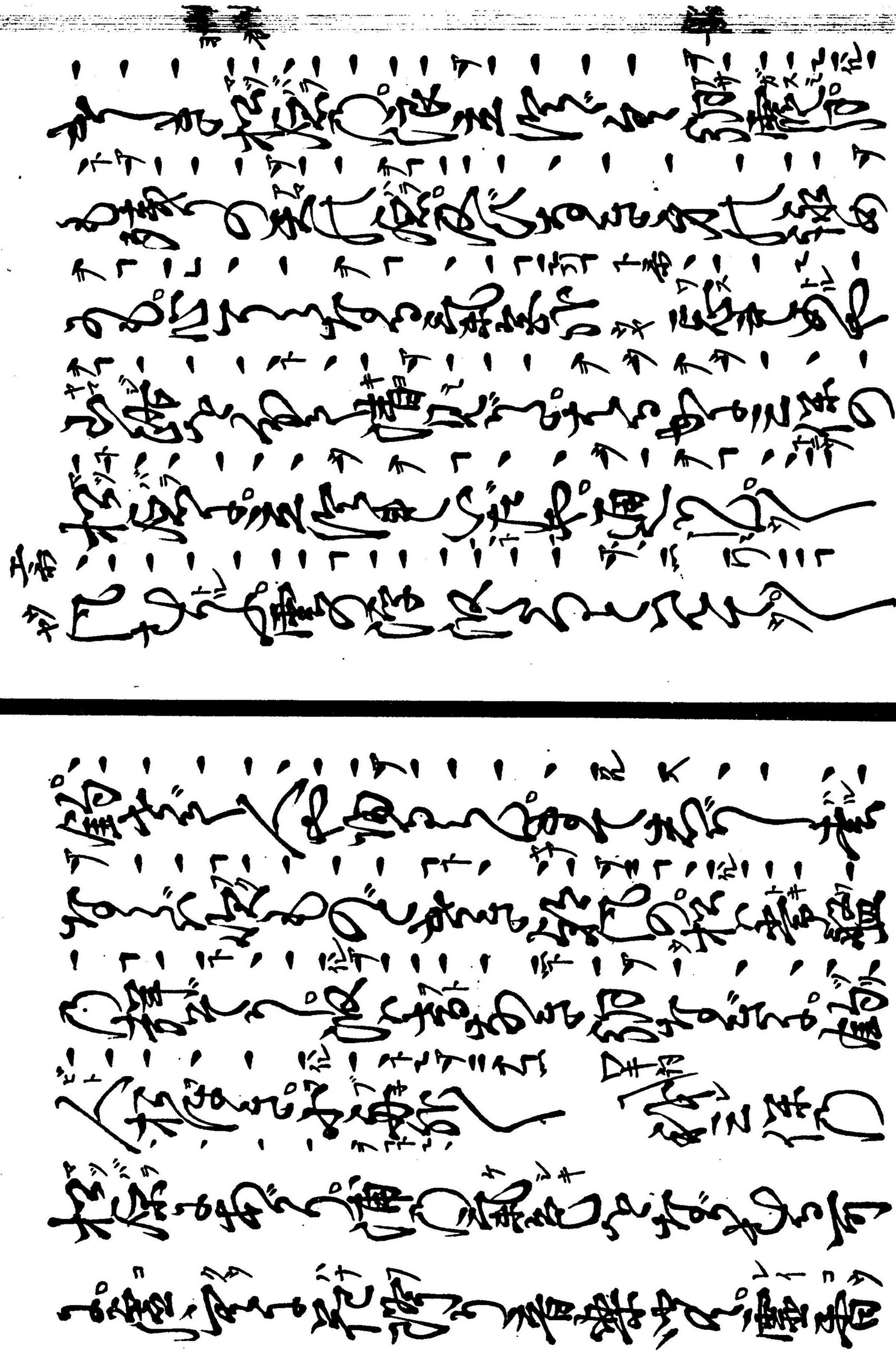
一ヲ一一一

言葉の素直なる偽りなきを尚
とし奉りべき事なり。理非
よりて是非決断すべき可也。
沙汰のそなめよ。常住の心掌作野
山法十人衆郎党にあつかる可きり。
又行ずも切なるしなぬ雪降て寒
さ。秘蔵の鉢木をきり焼
あつ志をいつ喜ばるべき。
いざ時の鉢木。梅桜松にて書
よな。是迄報なる和賀の梅田。越後の
桜井上野の松井田。合せて三ケ所。
孫ぐよ迄相遠あるべる有





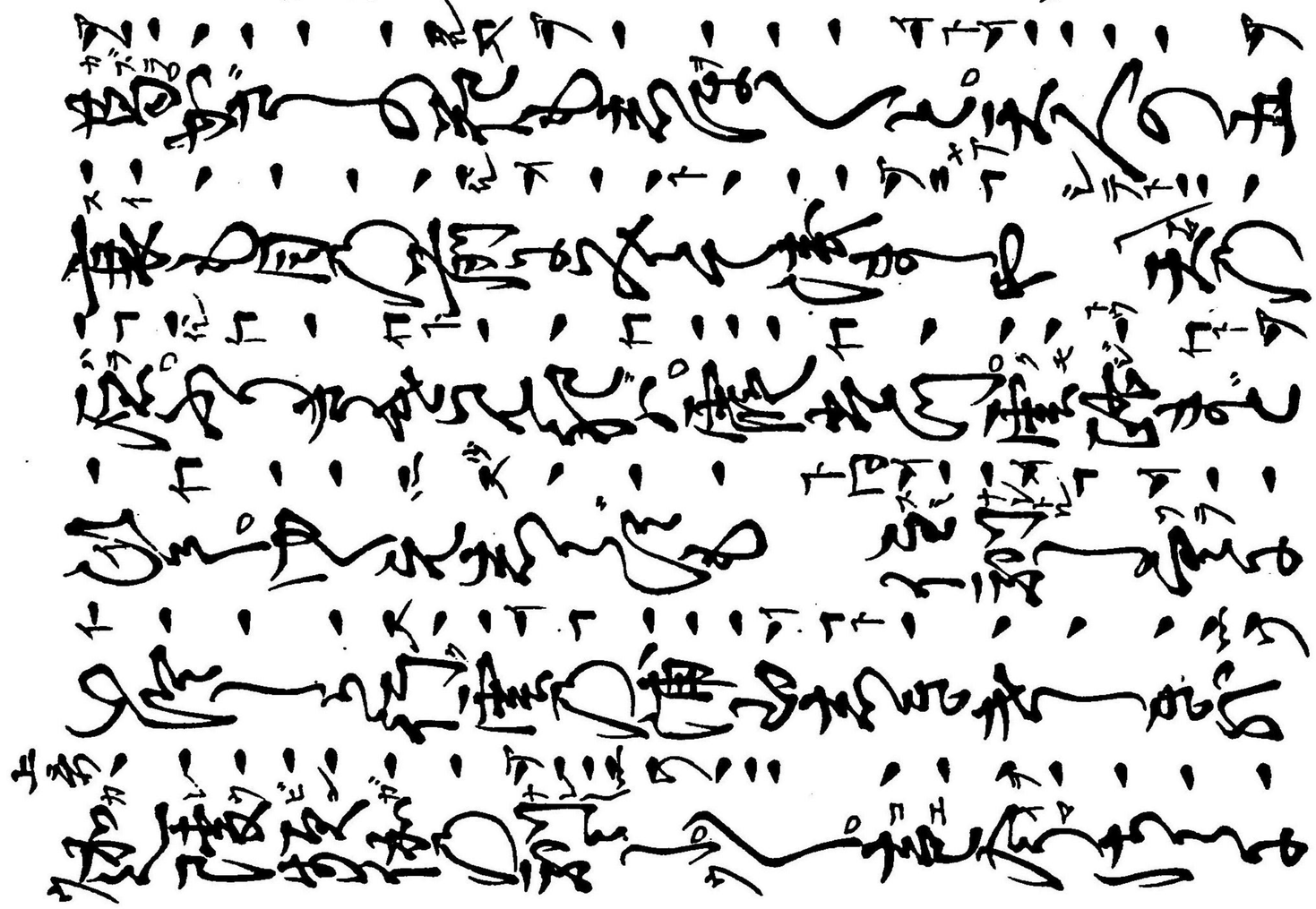


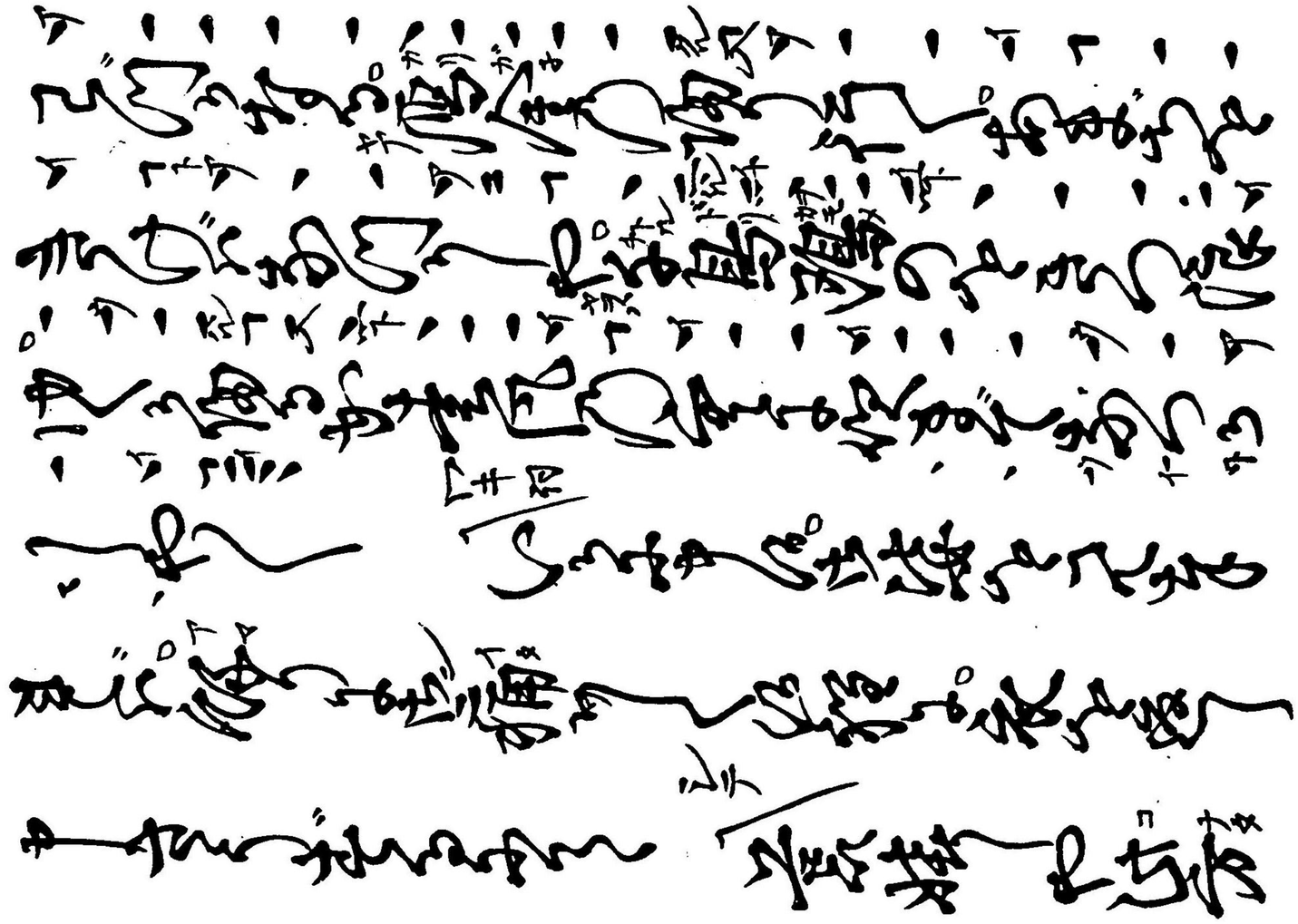


四方(ヨモ)に薫(クン)じ。毛髪(メカミ)に事(コト)なぬ處なり。
見成(ルナル)松(マツ)のうつくしき衣掛(カケ)まうすまで
てうみまどろ香物(イロカモノ)して常(ツネ)衣(コロモ)なる
あらじ。いろ模(サマ)にくゆり吉き人(ヒト)もなん
と。家の宿(タカラ)とあるべかめる　男(シテ女)
も衣(コロモ)は沈方(コナタ)のまそ。行ふ法れば
見ひろげる衣をまとひ猫(トリ)なれて海(カ)
とひろ　男(シテ)は人の羽衣(ゴロモ)をとりて
まく人問はあるべきわ(ワキ)あらじ。
はぐくみとる法へ　そもは衣の
ぬしとは扱(ニン)をまうしたるや。
ちもあらじ。妙(ミ)の寺物(ドク)は留めんとき。

國の賢と為べきや。夜ふけ人事
ちゃまず　シテ　カナ　やなる羽衣ありて花
行の道もうえ。テンギャウ　カヘ　ものうるる
けまで。カウ　ちりて返り　ワキ　カルニ　ヨク　ひち
ニニニニニニニニニニニニニニニニ
河と世すもの。よくうきもう　チカラ　かえ。
付　キモト　ずす。沒　アマ　羽衣　ハゴロモ　うも

カル　ニニニニニニニニニニニニニニ
ニニニニニニニニニニニニニニニニ
ニニニニニニニニニニニニニニニニ
ニニ

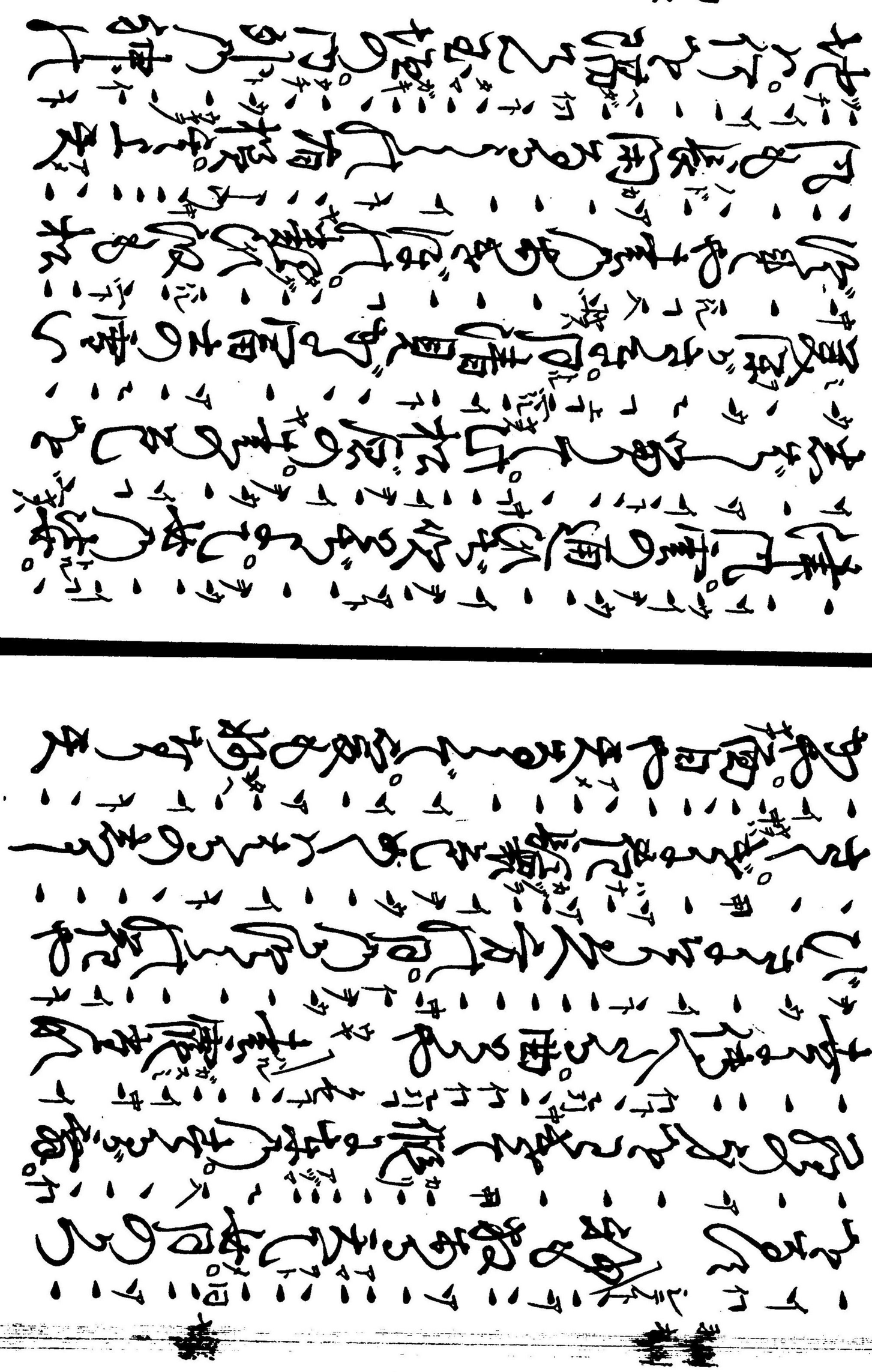




ワキ　扨。家居する天人の
舞楽作り奏して奉り給へ。衣
を返し申べし
シテ　うれしや扨は天上
人間共に御ゆるさば。
ワキ　人間ゆゑ形見の舞曲を見せ
ん。
シテ　舞曲あり。只今奏して。

ワキ　きのうきの人よ伝へよ。べし。まなざし。衣を
てふけまで。きりて。先色。給へ
ワキ　いやは衣をうばなど。舞曲をなさで
シテ　其儀。よ。天人もあざむく舞べき
ワキ　疑ひ人間よあり。天人偽なき和を
シテ　ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、
ワキ　衣をうばうやさぶらふ。羽衣をうば

[illegible]
[illegible]
[illegible]



いとゆかしきものかな。

君が代は。千代に八千代にさざれいしの。巌となりて。こけむすまでと。

なるべきものを。

なり来れば。

くきんくど。孤雲の。

花にとまれる。白鳥の。

紅なる。

上にて。

南無帰命頂礼。地大。

上にて。

玉敷く。

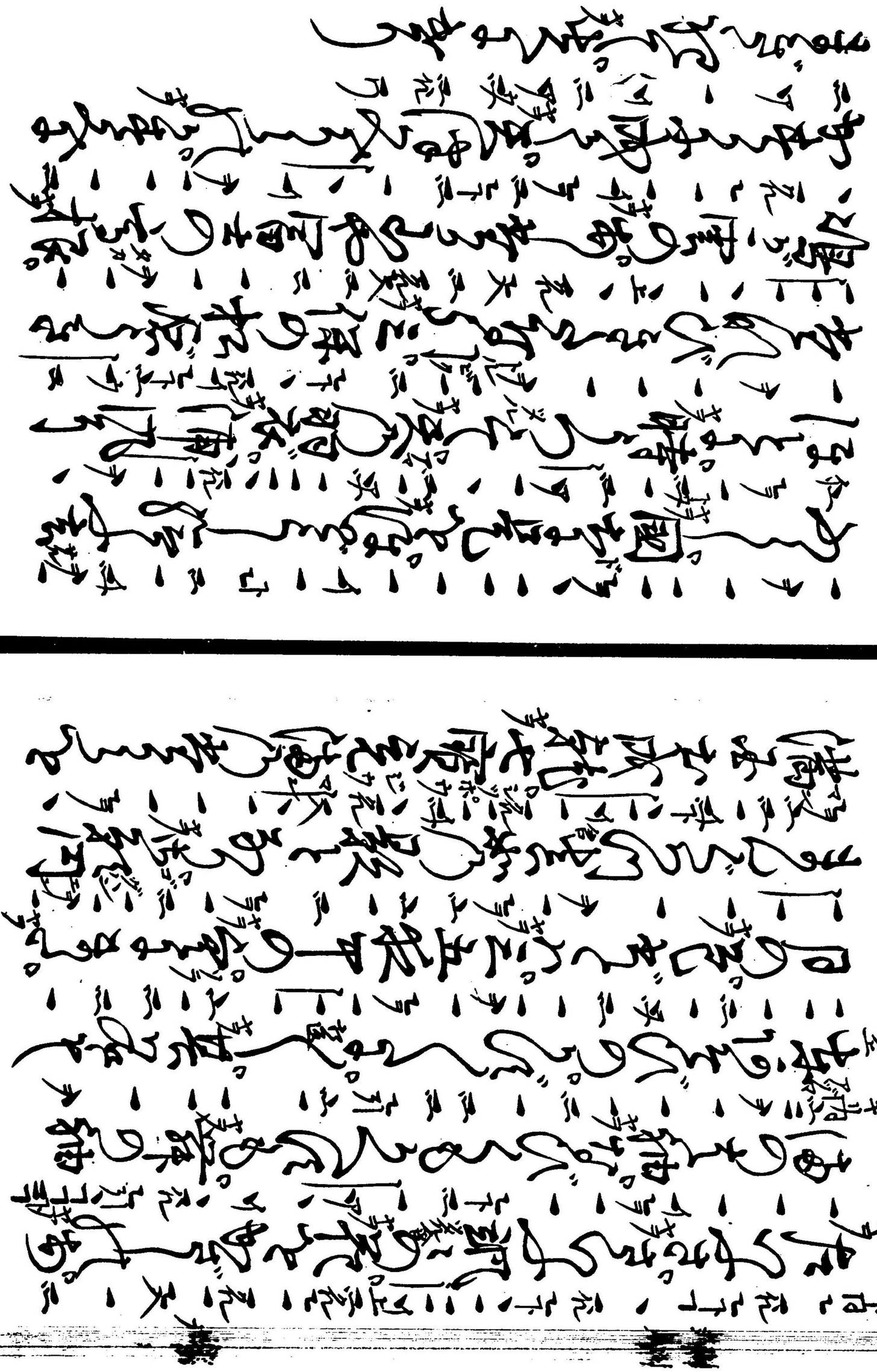
上にて。

綾織り。

上にて。

羽衣。

色香も。



道成寺

紀州道成寺の僧侶、作。

扨も當寺に古より細工なる細工にて、

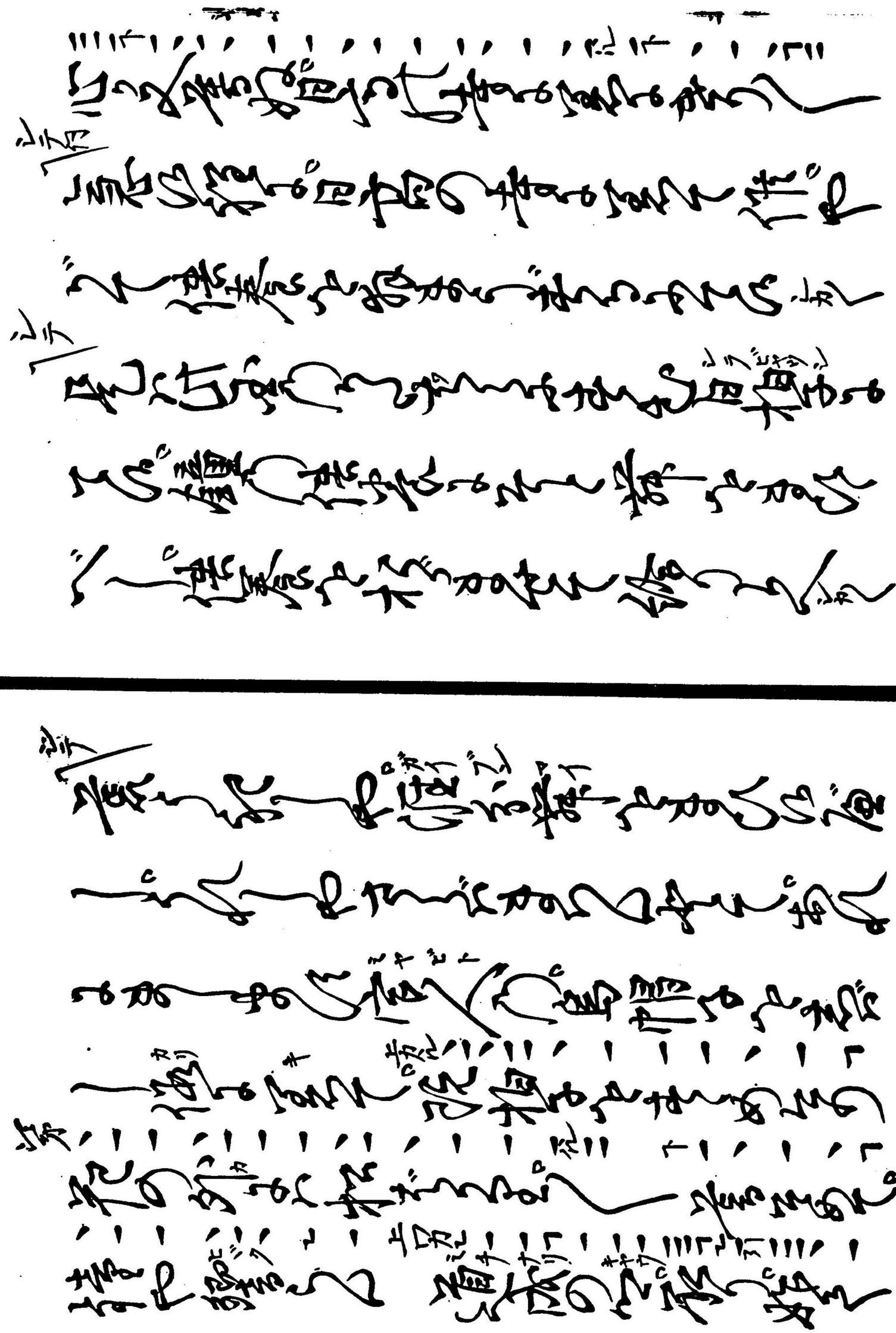
大數撞鐘迄拵ひ、洗濯有

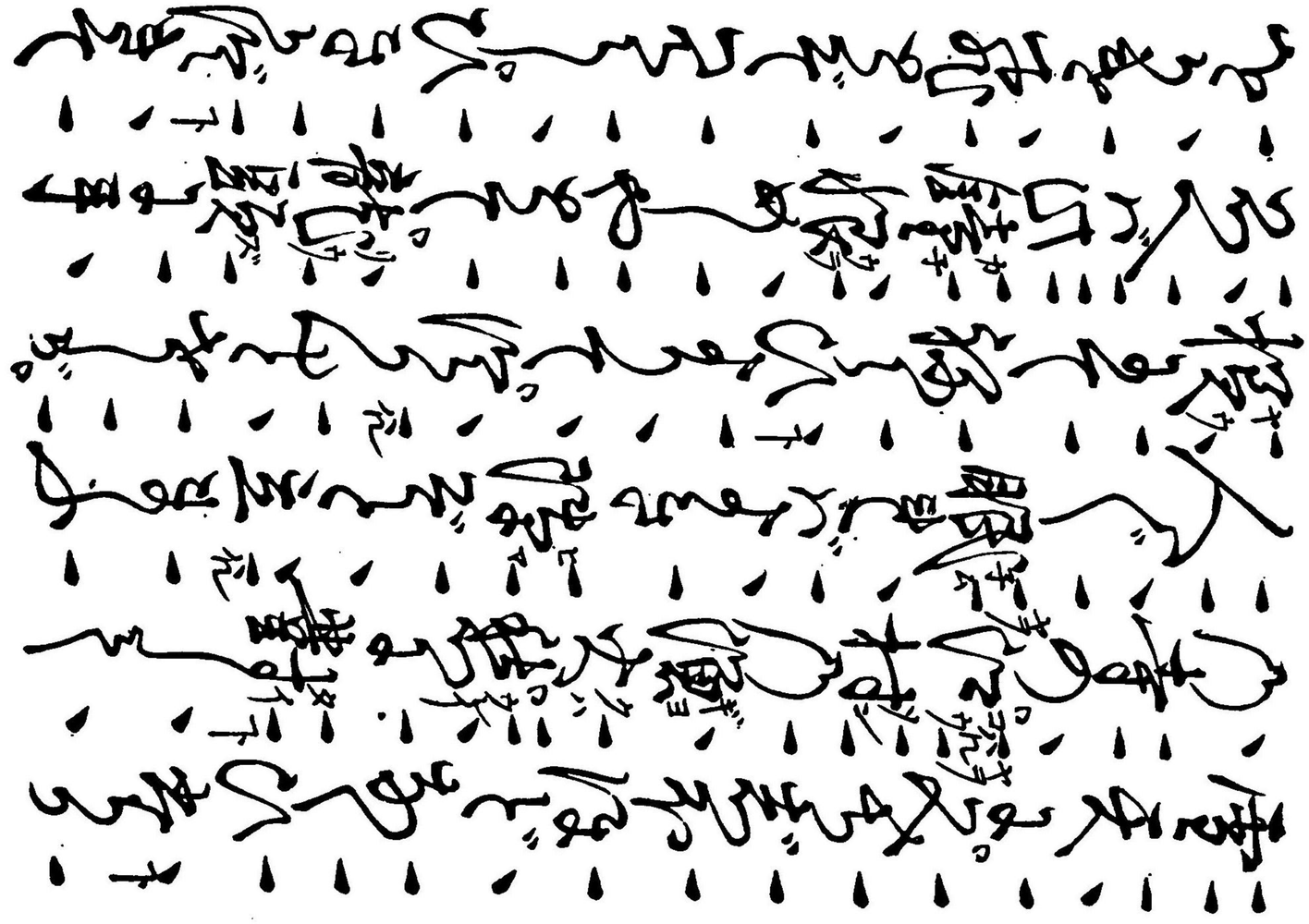
度し鐘を鑄させ、今日吉日にて

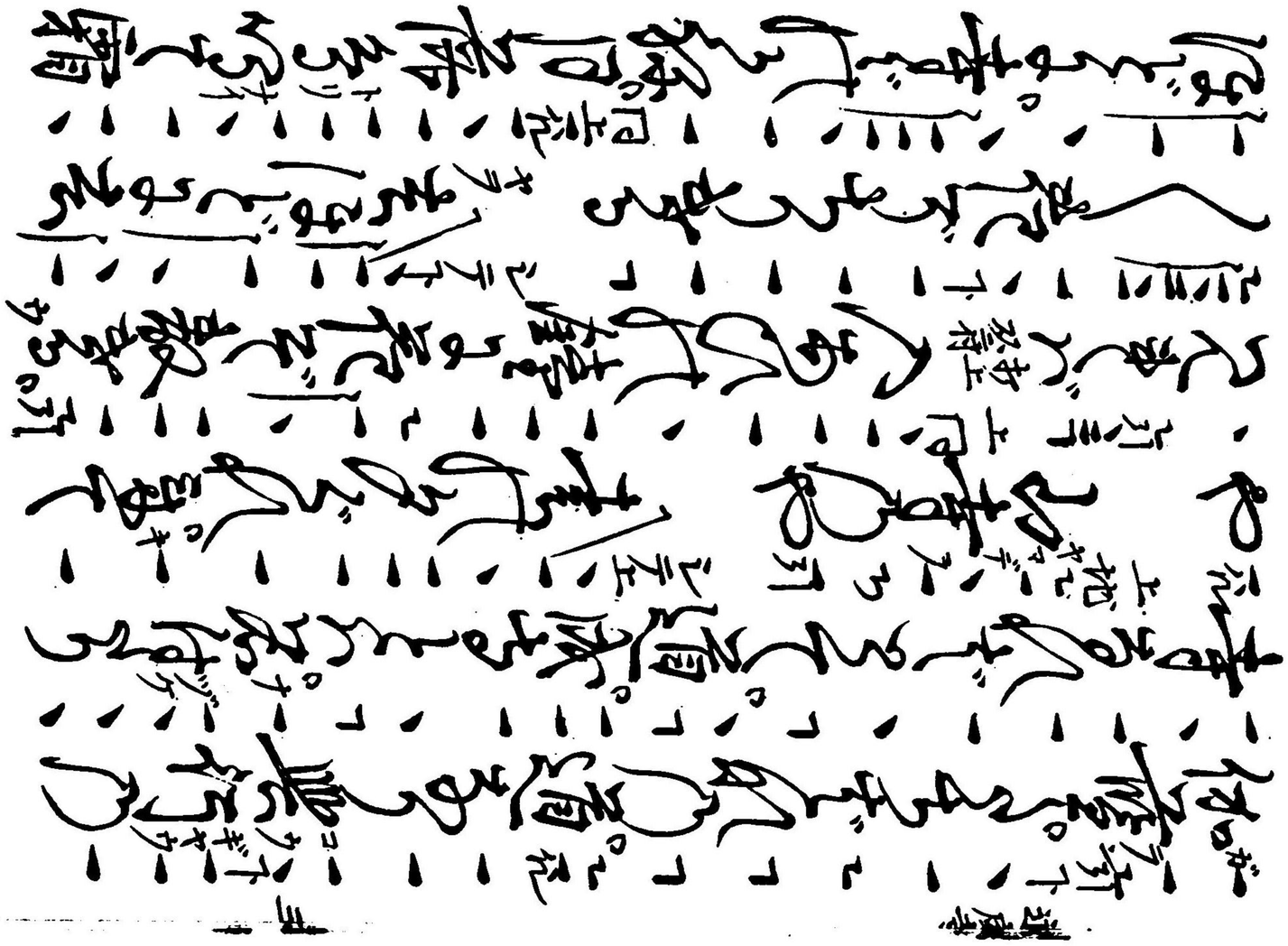
祈願の孫八供養をいたすべきなり

いづる鐘方ぞ鐘とど撞（シユ）撞（ロウ）へそ
ゆうう　さ（カシ）ぞいまよ撞撞へそそぐ法
ゝ　今日（四半）鐘の供養をしたう
ぎらみて有ぞ子細ゆ問ぬ女人
禁制なてゆるぞ一人も（ナシ）（シテ）公
ぬ是ゆ心えゆく長（ナガ）て供（シテ）

一一一







一死ニ一生ニ（ワキ）言葉道断。お授の義
ぞ出よ者（シカク）（ワキ）
を為る行ひ女人禁制のよう申
てはよ曲事なる有ぞ。ゆゆ（ツイ）慎
ゆ滝ゆ入ゆ。沢蛭よ付ゆ女人禁制
とゆ申るいたれのゆと御なり作ら
いや行ゆ為ぎゆ（ワキ）（ワキ）さぶ長僧と

後ゆ吟を申ゆ。（ツレ）（ワキ）（ツレ）（ワキ）（ツレ）（ワキ）

を寵光の餘りよ。あれ宮僧らそは
が妻よりよりんで獻（タムレ）りたれば
心（ゴコ）は誠と松もひと年（ヨン ゲツ）を送（オク）るべ。
そこ似宮僧庄司がもとよりあり。
似女使又人をびまつては。宮僧の
聞（チヤ）りゆき。給はとそはとびもて

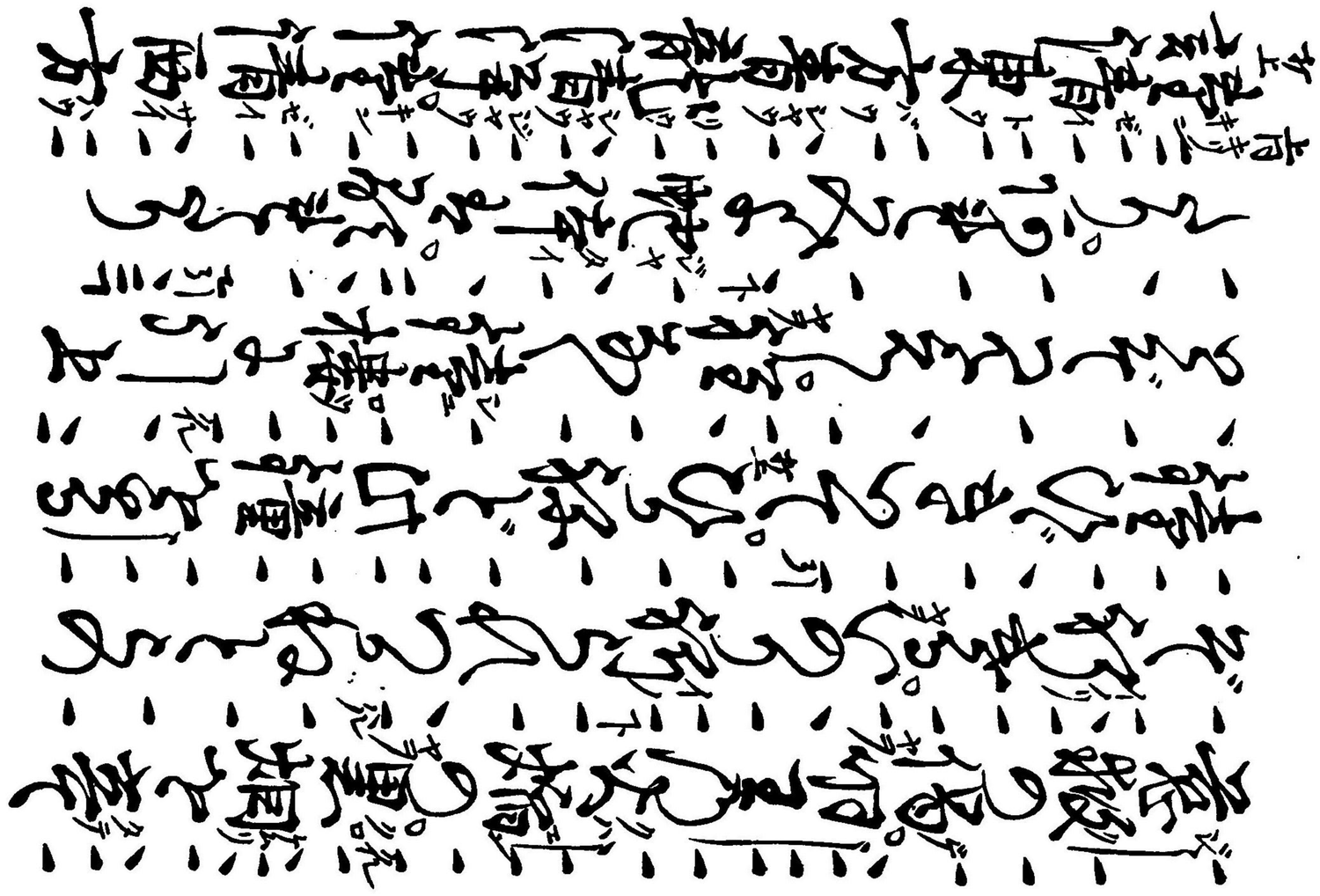
和給はぬぞ。急もくなくと申しぶ。
宮僧大きふきらぶたあるぬする
もてあ。松よはあぎれもびもて汝
寺よ妻りぶらよ頼光よ申しぶ。
隠（カク）きべき可きれば給を錦をお
ろ長きよ汝宮僧を隠しく。

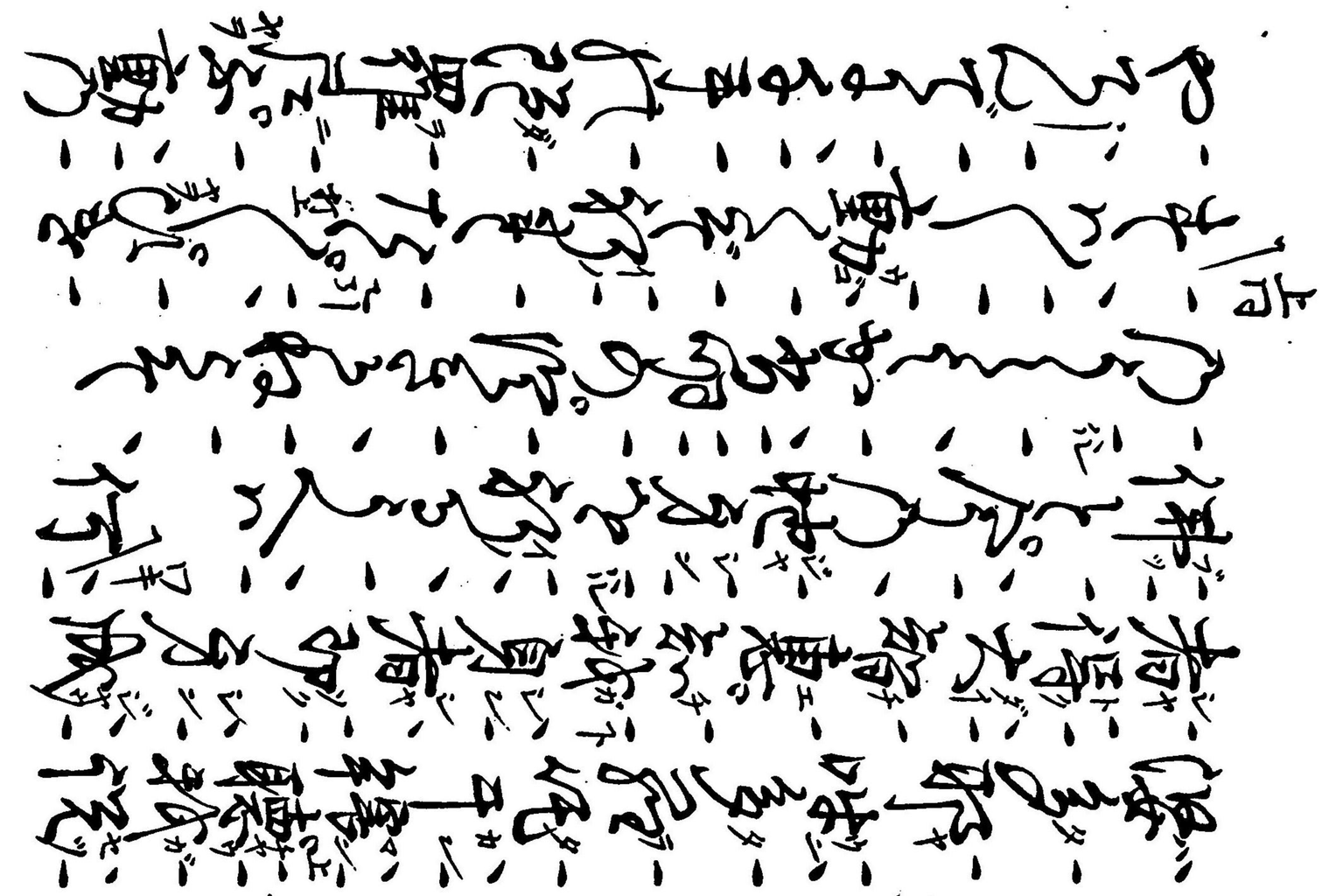
扨後ろ代へと蛇ヶ淵まで来て迯
くるに折節日高川の水勢ひ増
しうぶ門の堰もとまるなることなる
しうまうしぶ一人の毒蛇と成
河を渡りやすく出来ふ事
哀うしと尋ぬる程に行くるを

あやめ竜頭とくやまと入淵へ
婦人を出し尾を引て来きぶ錆ハ
湯と成ぶ鉄よ代とうれたちぬ
あんぼうきわ語みてそ言語
道断ぐるれうき所物居仕い
ぐる 其時の女房執心殊つぐ

法錫を障碍となす。我人の
行切も不相の為にて狂乱涯分
祈りに付て二度錫杖をぢ
みて　光仏ぐらは　水うつ
ヒタカガバラ
ち日高川の水ぶくれつる
ここここここここここ
共行去の法力無べきと　皆一同

ここここここ　東方は海三世仏　西方は
南方は軍茶利夜叉仏　西方は
大威徳仏　北方は金剛夜叉仏
中央は大日大聖不動　動
ここここここここ
うごかぬうちの曩謨三曼陀
特日羅南　旋多摩訶曽遮那





白拍子龍女は中世紀伊黄龍一
大三千大千世界の恒沙龍王も
ひとり釣愛衰敗自謹ひとりぎんぎ
きぐるまの大地のあるべきぞと。狩
まいのれうちとまちぶとうとき
あぐりて勢ひ鐘を向ひて息
ほ。猛火を吹きて生身をもく。舞高
の門まで深淵まで飛んでぞなき。
ひぞたりぬと落涙ぞなき。
坊よぞ向りきる

龍虎

法道ヲ去リテ二ツニ二ツニ分ケ二ツニ二ツニ分ケ二ツニ二ツニ分ケ

流布の跡を尋ぬ。庫後天代迄
有るべし。此間八九州は博多の津より作
處よりは便利なる間。此度此方迄
唐使
天の原八十潟うきく
漕出るも。船のまろもまろぬ
一一一

一見せんとて、はるばる江戸浦を
隔てて人煙寂寞たる海水天に接する
つゝぐもてん遥なり。詠めやる者
山本の村竹、岸に寂寞たる西日き
よう見成そ風づるれとも人の寄り
ぶ出去を待る可とも寄ねとも

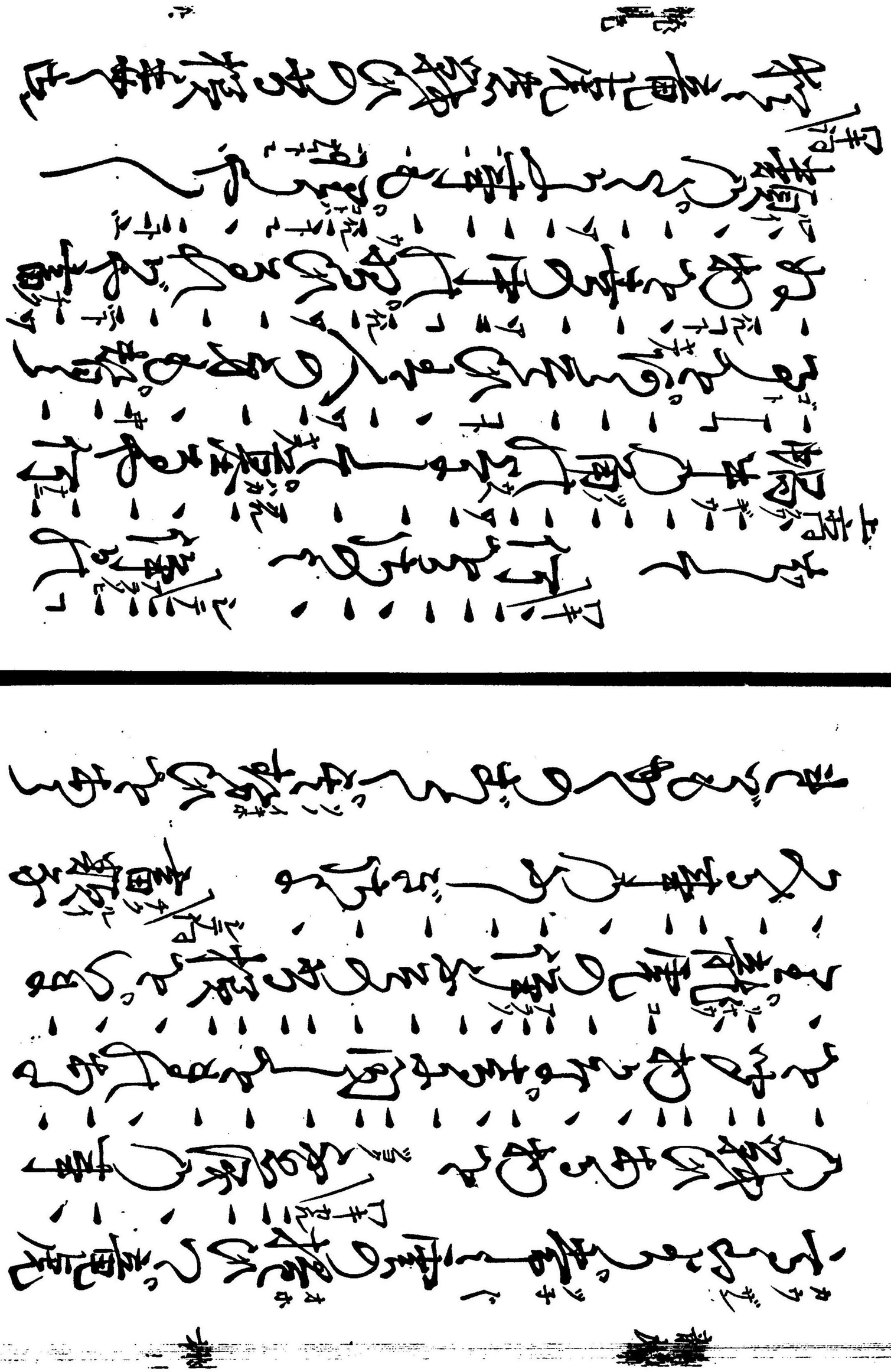
なを作
二ツ元々折とそて。まの之新よさし
花の匂ひをすらぶ。
下庵ろ。と。寂よ者き。詠ろな
五月雨寂しうして雲は草に。そで
あれぶ大度萬様の梅。精もと
よそしろぶ安倍よよれで心なき。

分もあれども明の沙汰なき
命ぜられて少しも
きこえ元コトなく
ぬ物も情なくなき
者様をウヤ見る
に鏡ウつる月日は程もなく
昨日キノフ今日キヨウ元旦ガンタンの雪とも
積モツて元コトなく元アニ元アニ
ある物ワビも元ナシ元ナシ
りて元ヤ元ダ元ナシ
いろ見なるシテハ
のハ
安なり元ナ様元ヤ元モン

ぢ度なく
ワキ 会よくぢ法をしてはわ
うな。我日本より此西の海。佛法
流布の古跡と見ねば。唐より渡天
の志有べきよりぞ。道ごとに立て作
扨は海天の中国。為うや。青海つ道
を幸とぞ有給ふ。御事うな

ツレカン 会痛りやうぢと行末も者
一一一一一一一一一一一一一一一一
き旅ゴロモ、シテ 立ち寄る日の本
の仏法東漸とふ旅
一一一一一一一一一一一一一一一一
ワキ 法
ち法の源者ときく
シテ 普伝と今更
ワキ 一一一一一一一一一一一一一一
シテ ゆ行くよ
上ツレ 一一一一一一一一一一一一一一
星の宮へと行度ぞ

一一一



初傳りて、それ世と変る者、その
身は威勢を失ひ、人間もまた
これ、虎は犬を失ひ、竜は雲を失ふ。猛虎深
山を下りて犬を捕へ、竜雲を失ひて、
ただ蚯蚓と同じ。賢人、世を失ひて、
愚者に制せらるるは、
その威勢、人に超えたるが故なり。

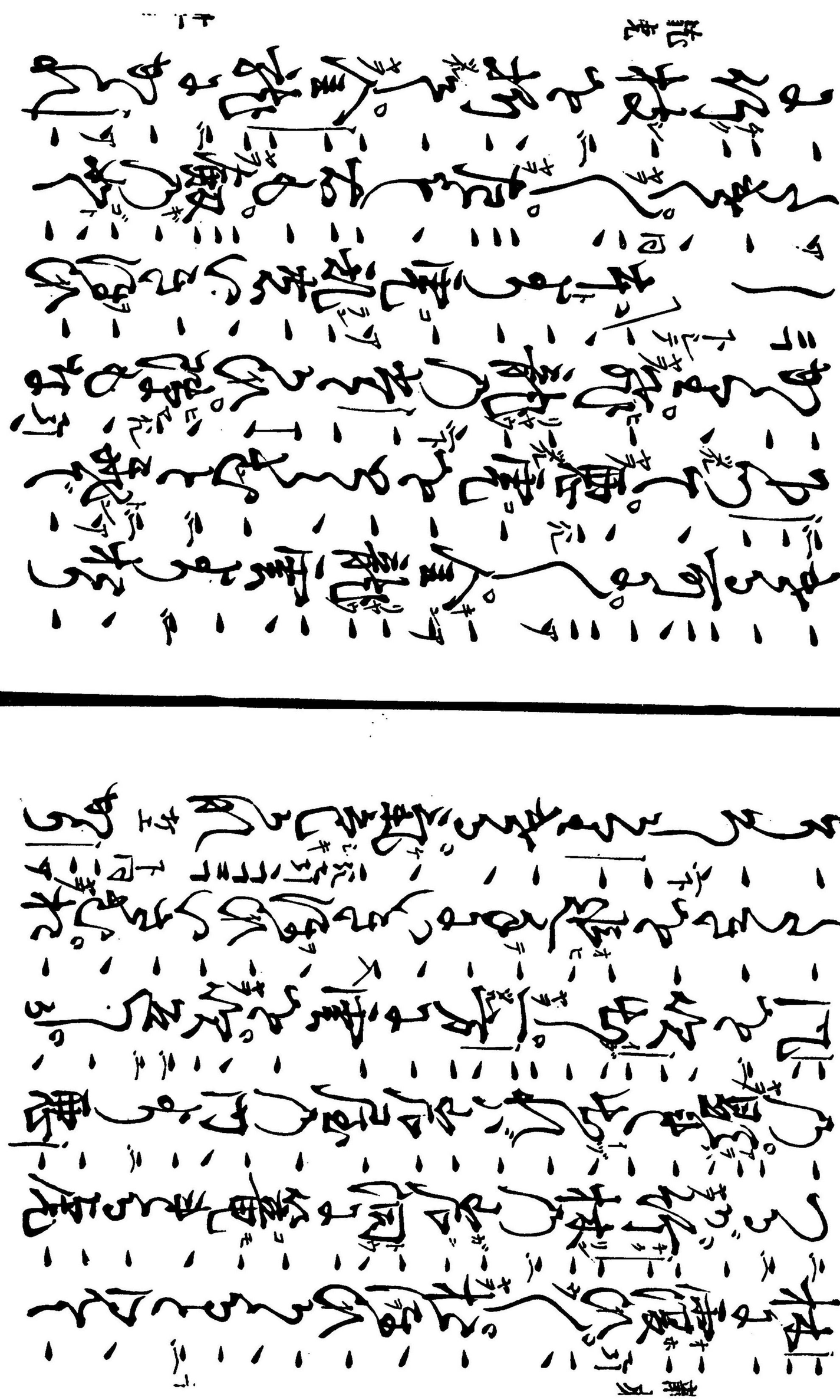
しかるに桀・紂、天子の位を失ひ、
匹夫となりて、天下の笑ひとなるは、
その勢、人に超えたるが故なり。
今、賢人、位を失ひ、
愚者に制せらるるは、
その勢、桀・紂に超えたるが故なり。
虎・竜、雲・霧を失ひ、
蚯蚓・犬に制せらるるは、
その勢、桀・紂に超えたるが故なり。
桀・紂、天子の位を失ひ、
匹夫となりて、天下の笑ひとなるは、
その賢、人に超えたるが故なり。
今、賢人、勢を失ひ、
愚者に制せらるるは、
その賢、桀・紂に超えたるが故なり。
虎・竜、雲・霧を失ひ、
蚯蚓・犬に制せらるるは、
その

そうぞ中より行なはるゝ清
さを我家と海辺に暮す法師
くゞ宝ぬ法の道を志る羅漢よ
仕へなる又山賊の盲も孤き
なると中わと竜吟ぎれば雲起
り虎傅きぶ門まぢと祈りもま

ありうるる法師ぎなりきれ
尼ぞ和国は初借り者牧もん
法ぢ辺づれ坊の林の
となるなる厳の法よ立よりて分
を清さ法へと行よ日もすぐき
ぬ服中さんとうよ生まび新を扇

上元又二十一アニ、
まさに私をば岩の下道をたどると。
元ニ又下ニ
いろ路をたどりてぞ行きける
下
扨も小忌やみ人の教へのまゝに
路を分け林を選ぶよう海をぞ乙
やうやうにして我が宅を
ヨル
打ちぞ過ぎて紅を
サツ

上青
雲打ちなびく雨の音。
ナル
鳥羽編書天地に暉く光れ中
ウナ
ヤ
ヨ
主竜の物の選
下
ヨ
ア
ニ
ヨ
ニ
元ニ
ヨ
ニ
ヨ
ニ
ヨ



255
138

明治四十一年五月二十日印刷
同　四十一年五月廿五日發行

版權所有

東京市牛込區新小川町二丁目十番地
詢正者　觀世清廉
（電話番町三百十六番）
京都市二条通麩屋町角十二番地
發行兼印刷者　檜常之助
（特電話三百九十番）
（振替貯金三五五八）

特42
42
444